

佐賀縣方言語典一斑

全

818.92
Si365s

081972-000-4

818.92-Si365s

佐賀縣方言語典一斑

清水 平一郎/編

M36

DAC-6976



清水平一郎著

佐賀縣方言語彙一斑全

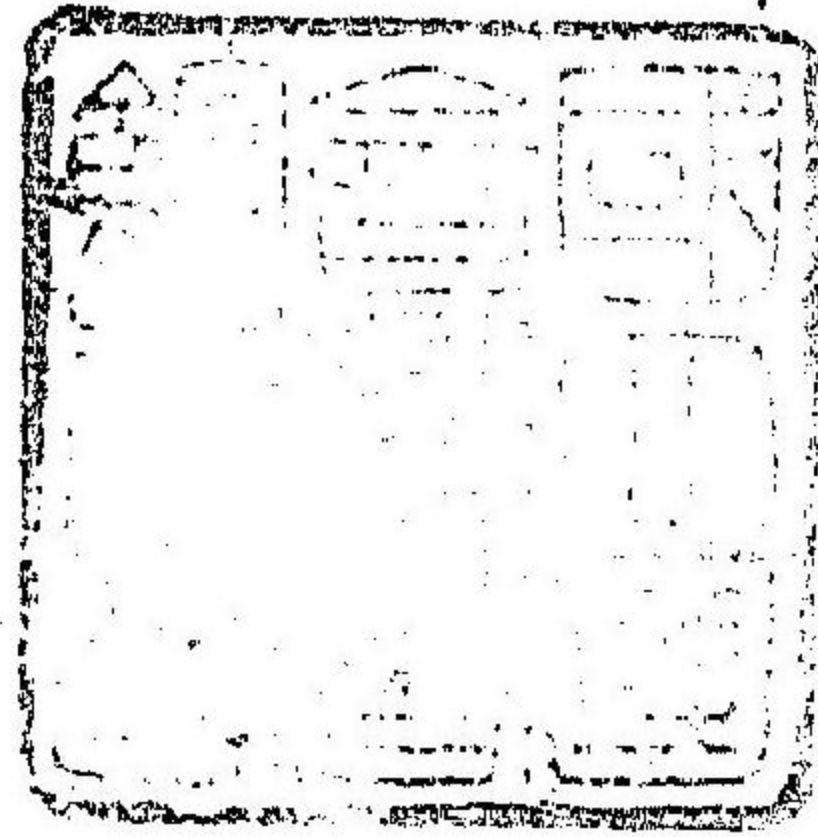
佐賀縣教育會發行

818.92 S. 365A

佐賀縣方言語典序

國語の統一が國民知識の進歩と思想の一致とに缺くべからざる要件なることは今敢へて多言を要せず而して國語の統一は必ず教育の力に待たざるべからず従つて國語の教授が國民教育の主要なる事業なること亦明なり然るに我國語の教授には特殊の困難あり言語と文字との關係文章語と口語との相異方言訛音の辨別等が既に普通教育の初歩に於いて兒童を苦まらめ爲めに教育上幾多の障礙を來せることは夙に識者の認むる所なり近時國語教授の研究が教育社會の注意を惹き是等の困難を去り障礙を去らんとする方法を講ずる者多く實際の教授に漸次進歩の緒を現はせること寔に喜ぶべき所なり然れども妄に新奇を競ひ空論を弄び未熟の考案を取つて直に教育上に

佐賀縣方言語典序



260933

實施せんとするが如きに至つては其の危険極めて大なりとす爲めに國民多數の子弟を戕賊し一國の言語文章を擾亂するのと尠からず國語制定の事業は一二の人の私案に依つて輕々しく決すべきものにあらず必ずや慎重の研究を遂げたる後に於いてせざるべからず今や政府は國語調査の必要を認め特に委員を設けて之に従事せしめたり其の大成は假すに多くの年月を以てせざるべからず是の時に當り吾人教育者の務むべきことは徒に一時の議論に惑はず靜に退いて研究を積むにあり其の重要な事項を擧ぐれば二あり曰く現在の正しき國語を平易有効に教授する方法曰く將來國語の制定に關する資料の蒐集是あり

想ふに地方々言の調査の如きは右の研究を成就する手段として最も有益なるものなり然れども之を單に好事者一時の零碎

的探求に止めず集めて大成せんことば決して容易の業にあらず佐賀縣教育會曩に佐賀縣方言語典を編纂して其の調査の一端を成し今又佐賀縣方言語典を發行して之を完うせるは地方語と普通語との關係を明にし教育上裨益する所頗る大あるべきことを信ず從來東北と九州とは一般に最も方言訛音の著しき地方と認めらるゝ所にして是等の地方が皆特に普通國語の普及に力を盡くせることは注意すべき現象なりとす而して佐賀縣教育會が其の事業として方言の調査を撰びたるは最も適切な著眼たることを失はず蓋し地方教育會は此の如き事業をなして始めて眞に有効の機關たることを得べければなり特に本書の著者は素養經驗俱に備へて自己出身地方の方言を研究せられたることなれば其の成績の顯著なること期して望むべきなり且つ本書は方言辭典の單に個々の言語を解説せるに反

して方言各品詞の性質用法規則等を説明したれば其の用一地方に限らず苟くも國語を研究せんとするものに參考の資となるものたることを疑はず茲に印刷の成れることを聞き其の舉を贅して一言を贈る

明治三十六年一月

岡田良平

上田文學博士書翰

拜啓愈御健勝に被爲渡慶賀の至に御座候兼て御約束申上置候方言語典拜讀の事誠に遅延致し何とも申譯無之別封小包郵便にて御返却申上候間御落掌被下度候
大体誠に結構に出來上り居り敬服の外無之候但し先般伊藤君に拜顔の節申上候通り

第一、佐賀縣下ノ方言分布圖ヲ製スルコト

い、母音子音ノ異同ニヨリ

ろ、動詞ノ活用方ニヨリ

は、てにをはノ種類ニヨリ

に、其他特種ノ点

第二、舊幕時代ノ領地圖ヲ製シ之ヲ掲クルコト但シ舊藩主ノ系統圖ヲ附スルモ妙ナラム

第三、舊幕時代ノ道中圖ヲ掲クルコト各大名ノ參勤交代ノ道中ヲ示スコト

第四、文典ノ例ノ中ニ何レノ地方ニ特有ノ者ナルカ記シ分クルコト即チ郡名村名若クハ全縣一般ニ通スルモノ、區別ヲ立ツベキコト

第五、方言ヲ如何ナル形(語体)ニ引キ直スカヲ示スコト

右は何卒此際御調査の上御示レ被下度全國中にての方言研究史上に一時期を畫レ候事と存候猶爲念愛知第二師範學校にて發表致レ候方言調査方針書手に入り候間御届申上候参考とも

ならば幸甚に御座候先は右用事迄 早々不一

明治三十五年

九月二十二日

上田萬年

凡例

- 一、この書は嚮に出版した辭書の缺を備はむ爲に編述したのである。
 - 二、方言の假名遣は假名の發音通である。
 - 三、拗音、促音は右下に小字を以て記し、引音(長音)は右肩に線を引いておく。たとへば
 ひ^ャーあ(ひ^ャあ) で^ャーあわ^ッか(ぢ^ャwaka)
- 一、語法も地方により幾分か違つてゐる。因て、その行はるゝ版圍を示すとは、上田博士の御教示もあり、編者も必要を感じてゐる。あかしく取調が一寸出来ないから、詳しいとはあとに譲り、たゞ舊幕時代の領地圖をそへて大體丈を示すとした。固より杜撰の誹は免れない

凡例

凡例

一、書中、西部とあるは、多久、武雄を中心として、その近傍より以西をさし、東部とあるは、佐賀、小城などを中心として、その近傍より東をさしたのである。荒島地方は両地方の間ともいふべく、田代はむしろ筑後に似より、唐津は特別にて、その城下のごときは、江戸語そのままである。故にこの本を佐賀縣語典といへど、唐津はどりのけであるところをこゝにとわつておく。

明治三十五年七月

著者 〳〵〵

佐賀縣方言語典一斑

目次

第一編

音聲の部

自 一頁
至 三七頁

第二編

言語の部

自 三八頁
至 一八六頁

以上

凡例

一、書中、西部とあるは、多久、武雄を中心として、その近傍より以西をさし、東部とあるは、佐賀、小城などを中心として、その近傍より東をさしたのである。荒島地方は両地方の間ともいふべく、田代はむしろ筑後、に似より、唐津は特別にて、その城下のごときは、江戸語そのまゝである。故にこの本を佐賀縣語典といへど、唐津はとりのけであるところをこゝにとわつておく。

明治三十五年七月

著者 〳〵〵

佐賀縣方言語典一斑

目次

第一編

音聲の部

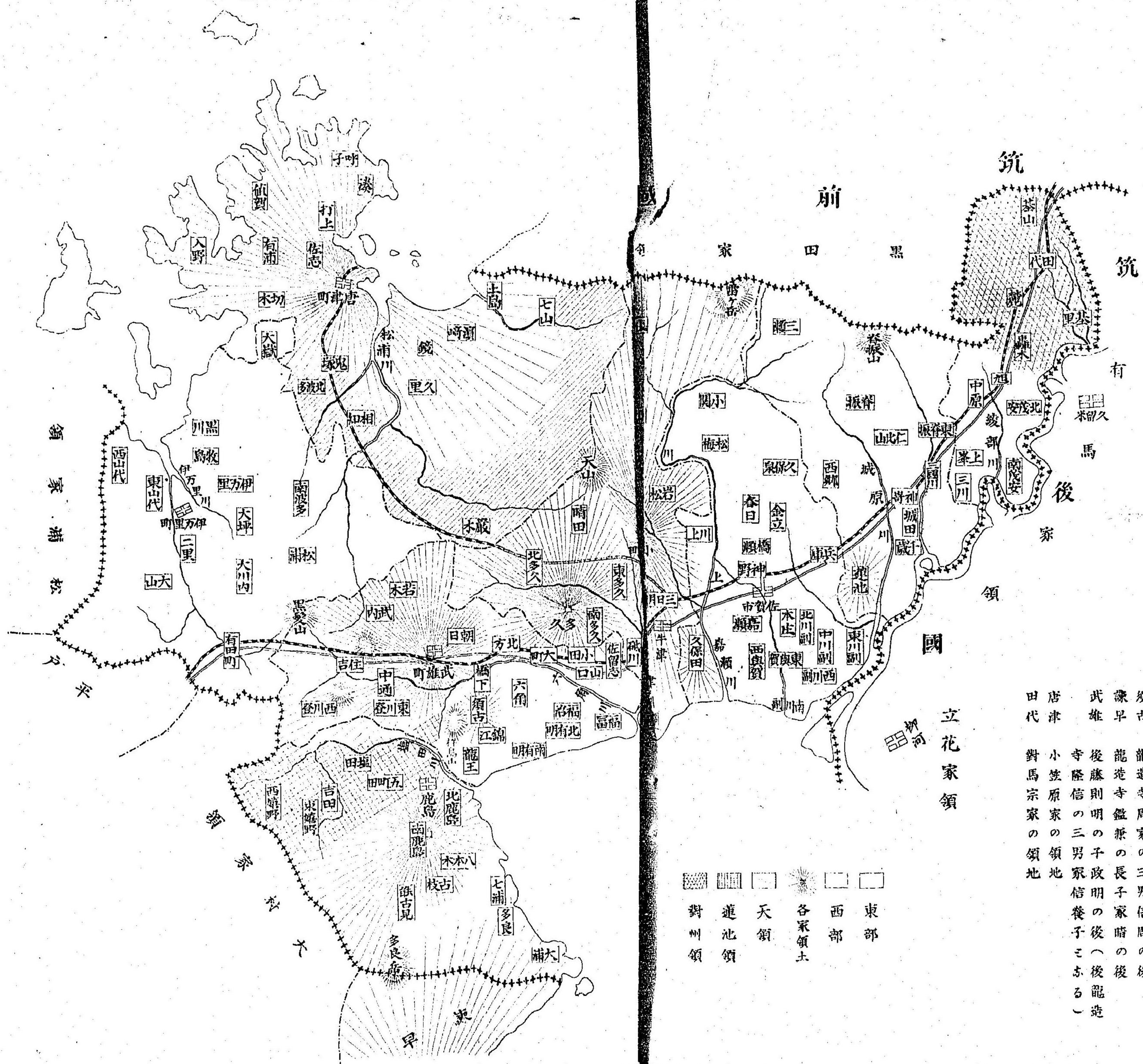
自 一頁
至 三七頁

第二編

言語の部

自 三八頁
至 一八六頁

以上

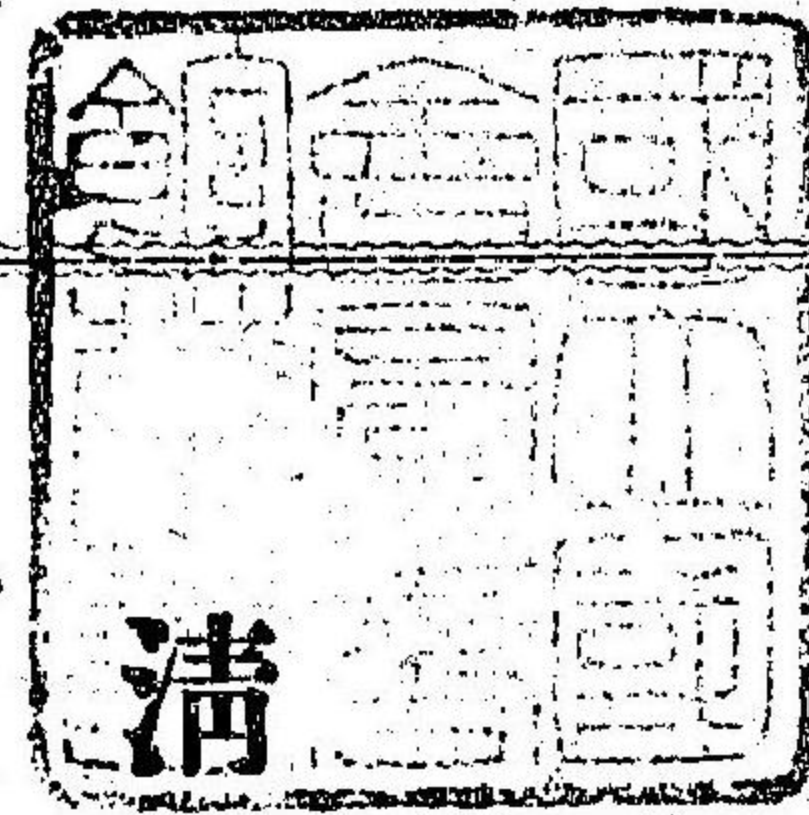


佐賀 鍋島直茂の後
 小城 鍋島勝茂の長子元茂の後
 蓮池 鍋島勝茂の三男直澄の後
 鹿島 鍋島勝茂の五男直朝の後
 多久 龍造寺隆信の弟長信の後
 久保田 龍造寺政家の次男安良の後
 須古 龍造寺周家の三男信周の後
 藤早 龍造寺鑑兼の長子家晴の後
 武雄 後藤則明の子政明の後(後龍造寺隆信の三男家信養子にふる)
 唐津 小笠原家の領地
 田代 對馬宗家の領地

立花家領
 東部
 西部
 各家領土
 天領
 蓮池領
 對州領

佐賀縣方言語典一斑

清水平一郎編纂



清音

第一編 音聲の部

ア イ ウ エ オ ……ア行
 カ キ ク ケ コ ……カ行
 サ シ ス セ ソ ……サ行
 タ チ ツ テ ト ……タ行
 ナ ニ ヌ ネ ノ ……ナ行

第一編 音聲の部 清音

ハ ヒ フ ヘ ホ……ハ行

マ ミ ム メ モ……マ行

ヤ ヲ ュ イ ヨ……ヤ行

ラ リ ル レ ロ……ラ行

ワ 井 于 エ チ……ワ行

ア イ ウ エ オ

列 列 列 列 列

是等五十音あるべき筈なれども、ヤ行の^レ、エとワ行の^ナとの三音は既に發音が出來ないものにて、従つて言語に用ひないものである。(音、方言に用ひないのみならず文語にも用ひない。)

濁音

ガ ギ グ ゲ ゴ……ガ行

ザ ジ ズ ゼ ゴ……ザ行

ダ チ ツ テ ド……ダ行

バ ビ ブ ベ ボ……バ行

ア イ ウ エ オ

列 列 列 列 列

この二十音の内にて、ザ行の^シ、ズとダ行の^ヂとは九州以外にては發音し得る處は甚少い。關東の人は^シ、ズが出來なくて、^ヂ、^ヅのみ發音し、字引を^ヂロキ(地引)十字を^ヂ、^ウ、^ヂと發音す。關西の人は^ヂ、^ヅが出來なくて、^シズのみ發音し、^{メイ}ヂ(明治)を^{メイ}シ(名字)ヂ、^ウ、^バ、^コ(重箱)を^シ、^ウ、^バ、^コ(十箱)と發音す。例の文部省より出でた假名遣法に、^ヂ、^ヅは^シ、^ズとかくも差支ないとしてあるのも、これが爲である。

半濁音

パピプペポ……パ行

鼻音(撥音)

ン

促音

ッ

拗音

キヤ キユ キヨ……キヤ行

シヤ シユ シヨ……シヤ行

チヤ チユ チヨ……チヤ行

ニヤ ニユ ニヨ……ニヤ行

ヒヤ ヒユ ヒヨ……ヒヤ行

ミヤ ミユ ミヨ……ミヤ行

リヤ リユ リヨ……リヤ行

井ヤ 井ユ 井ヨ……井ヤ行

ギヤ ギユ ギヨ……ギヤ行

ジヤ ジユ ジヨ……ジヤ行

ヂヤ ヱユ ヱヨ……ヂヤ行

ビヤ ビユ ビヨ……ビヤ行

ピヤ ピユ ピヨ……ピヤ行

ア列 ウ列 オ列

この音についても、シ、ズが出来ない地方の人は、シヤ、シユ、シヨが出来ない。ヂ、ヱの出来ない地方の人は、ヂヤ、ヂユ、ヂヨが出来ない。即ち、十両も重量も區別はないのである。併しこれ等は出来ないというて、むつかしき外国音さへ稽古する今日、之を放任するとは、果して教育家の本色であらうか。

クッ クヰ クヱ クヲ……クッ行

グッ グヰ グヱ グヲ……グッ行

カキテ (書)	カアイテ	キヤアテ
サキテ (咲)	サアイテ	シヤアテ
タキテ (焼)	タアイテ	テヤアテ (Tya-je)
ダキテ (抱)	ダアイテ	デヤアテ
ナキテ (泣)	ナアイテ	ニヤアテ
ハキテ (吐)	ハアイテ	ヒヤアテ
マキテ (巻)	マアイテ	ミヤアテ
ヤキテ (焼)	ヤアイテ	ヤアアテ
ワキテ (沸)	ワアイテ	井ヤアテ (Wya-je)

タイテをナヤアテ (Tya-je) と發音するものもあるが、下等社會に多い様

である。

シといふ音も、その父音がぬけてアと合する場合にはキの父音がぬけた場合と同様である。

カアシイテ (貸)	キヤアテ
サアシイテ (指)	シヤアテ
サアガアシイテ (探)	サギヤアテ
ワタアシイテ (渡)	ワテヤアテ、ワチヤアテ
ハナアシイテ (話)	ハニヤアテ
マアシイテ (増)	ミヤアテ
カエシテ (返)	カヤアシテ
	カヤアテ

クラァシィテ(暮) クリャアテ
カハシテ(替) カワァシィテカ井ヤアテ

かくアイはヤの引音に發音さるゝのが一般であるが、筑後に接する地方にては之をエの引音に發音してゐる。左の如し。

カキテ カイテ ケーエテ(Ke-te)
タキテ タイテ テーエテ(Te-te)
カシテ ケーエテ(Ke-te)
ハヒ(灰) ハイ へーエ(Ke)
カヒ(貝) カイ ケーエ(Ke)

第二、ウイが#1の引音(we)又はイの引音(i)になる。

クヒ(杙) クゥイ ク#イ(Ke)又はキイ(Ke)
スヒ(吸) スゥイ シイ
ツヒ ツゥイ チイ
ヌヒ(縫) ヌゥイ ニイ
ユヒ(結) ユゥイ イイ
ク#モン(食物) シイモン(吸物) センシイ(泉水)
オトチイ(一昨日) カミイイイ(髮結)
ウキテ(浮) ウイイテ 井イイテ(Wi-ai)
スキテ(隙) スイイテ シイイテ
ツキテ(就) ツウイテ チイイテ

ヌキテ(抜) ヌウイテ ニーイテ
ムキテ(向) ムウイテ ミーイテ
アルキテ(歩) アルウイテ アリーイテ
カクシテ カクウイテ カク^井ーイテ (Kakwie)
ウツウシイテ ウチーイテ
ツブウシイテ ツビーイテ

第三、エイがエの引音(㊦)となる

エーイ(榮) エーエ
セキテ(塞) セエイテ セーエテ
へギテ(剝) へえイデ へーエデ

第四、オイがエの引音(㊧)又はエの引音(㊨)となる

オヒ(嫻) オーイ エーエ 又は エーエ
イコヒ(憩) イコオイ イケーエ
トヒ(極) トオイ テーエ
ヨヒ(宵) ヨオイ エーエ
ナカイケ(中憩) オセー(遅イ) モレ(塙)
オキテ(置) オーイテ エーエテ
コギテ(漕) コオイデ ケーエデ
ソギテ(殺) ソオイデ セーエデ
トキテ(解) トオイテ テーエデ

ノキテ(退) ノオイテ 子エテ
 オシイテ(推) エエテ(we-te)
 コオシイテ(漉) ケエテ
 オトオシイテ(落) オエエテ
 ホオシイテ(于) へエテ

第五、エウがユの引音(ユ)となる

ケフ(今日) ケエウ キユウ(キ)

テフ(蝶) テエウ チユウ

へウ(瓢) ヒユウ

レフ(獵) レエウ リユウ

エフ(醉)

エウ

ユウ

ヒユウタン(瓢箪)

ユウテ(醉ウテ)

エウは普通にヨウ(ユ)となる。即、ケウ||キョウ(Kyo) テウ||チョウ、
 へウ||ヒョウ、レウ||リョウ、エウ||リョウ、ステウ(捨テム)はステ
 ヨウ、ウケウ(受ケム) ウケョウ、などのやうである。然るに、この
 方言にては、皆、ユウとなり、ステウは スケユウ(Schu)、ウケウは
 ウキユウ(Schu)となる。

第六、オウはウの引音(ウ)となる。

オフ(負) オウ ウウ

コフ(乞) コウ クウ

ヒロフ(拾) ヒロウ ヒルウ

ヨク

ヨオウ

ユウ

借錢ウ¹ウタ(負ウタ)

物チク¹ウタ(乞ウタ)

物チヒル¹ウ(拾フ)

ユ¹ウキタ(能ウキタ)

ク¹ウヤ(紺屋)

ク¹ウヂ(小路)

オ¹ウは普通にオ¹オと發音するのである。

オホ(大、多)は普通にオ¹オと發音するのをこゝにてはウ¹ウと同様にウ¹ウと發音す

オ¹ホ(大、多)

オ¹ウ

ウ¹ウ

ウ¹ウカワ(大川)ウ¹ウアメ(大雨)ウ¹ウニズ(大人數)

引音のつきては、これ等の外、普通違ふ處は少いやうである。但、ア¹ア、

イ¹ア、ウ¹ア、エ¹ア、オ¹ア、なぞが如何なる場合に用ひられて如何に發音さるゝかは、あとに譲りて、これから一種違つた轉訛のつきて述べてみよう。

第七、リが他音の下にある時は大概イとなる。

アリ(蟻)

アイ

イリ(入)

イイ

ウリ(瓜)

ウイ

エリ(襟)

エイ(回)

オリ(織)

オイ

カリ(狩)

カイ

キリ(桐)

キイ

クリ(栗)

クイ

ケリ

コリ(懲)

コイ

サリ

シリ(尻)

シイ

スリ(掏摸)	スイ	セリ(芹)	セ ^レ エ
ソリ(朔)	ソイ	タリ	タイ
チリ(塵)	チイ	ツリ(釣)	ツイ
テリ(照)	テ ^レ エ	トリ(鳥)	トイ
ナリ(成)	ナイ	ニリ	ニイ
ヌリ(塗)	ヌイ	ネリ	ネ ^レ エ
ノリ(糊)	ノイ	ハリ(針)	ハイ
ヒリ	ヒイ	フリ(降)	フイ
ヘリ(藁)	ヘ ^レ エ	ホリ(堀)	ホイ
マリ(毬)	マイ	ミリ	ミイ

第八、レがイに訛るとがある。

ムリ(無理)	ムイ	メリ	メイ
モリ(森)	モイ	ヤリ(鎗)	ヤイ
ユリ(百合)	ユイ	ヨリ(寄)	ヨイ
ラリ	ライ	リリ	リイ
ルリ	ルイ	レリ	レイ
ロリ	ロイ		

コレ(是)	コイ	ソレ(其)	ソイ
アレ(彼)	アイ	ドレ	ドイ
ダレ(誰)	ダイ		

クレロ(シレヨ) クイロ
キタレ(來) キタイ
ゴザレ(御座) ゴザイ
ナサレ(被成) ナサイ

レがイ訛るのは特に習慣がありて、之を一般に及すとは出来ない、

第九、リをイに訛る反動として、イをリに訛るとがある。

ニホヒ(香) ニチイ ニチリ(nimori)
シヤウユ(醤油) シヤウイ シヤウリ(sori)
コヒ(鯉) コイ コリ
タヒ(鯛) タイ タリ

クワイ(會)

クツリ(Kwori)

マカナヒ(賄) マカナイ マカナリ

これも一般に及すとは出来ない。クツイ(會)などは單に村會、青年會などいふ場合にはソソクツリ、セイチンクツリとは減多にいふはねども、村會に、青年會に、なまといふ場合にはソソクツリイ(ソソクツイニ)セイチンクツリイ(セイチンクツイニ)、など普通にいふ様である。

第十、ユをイに訛るとがある

アユ(鮭) アイ カユ(粥) カイ
サユ(湯) サイ シヤウユ(醤油) シヤウイ
フユ(冬) フイ ツユ(露) チイ(雨)

第十一、ヌをンに訛ることがある。

イヌ(犬) イン ウヌ ウン
キヌ(絹) キン

第十二、クワをクッ(Kwo)又はカと訛ることがある。

クハ(鋏、桑) クワ クッ カ
クワイ(慈姑) クソイ カイ
クハン(食ハヌ) クワン クワン カン

佐賀市及其近傍のみはクワといふべきを皆カと發音しカイ(會)カン(觀)といふからクワ→クッ→カとなり「カノ木」(桑の木)などいふ。

第十三、ルを引音に訛ることがある。これは西部地方に限る様である。

マル(丸) マーア サル(猿) サーア
タル(樽) ターア ホタル(螢) ホターア
ハル(春) ハーア

第十四、ラ行の音をダ行に訛ることがある。併これ等は無教育の者や、小供に多い。

ランプ ダンプ
リップ(立派) デッパ
レンコン(蓮根) デンコン
ロク(六) ドク

第十五、ダ行ラ行に訛るともある。こたも無教育の者に限るやうである。

デン パーウ (電報) レン パーウ

ド ク (毒) ロク

第十六、ヒ行をフ行に、フをヒに訛るとがある。

カゼヒク (風引) カゼフク

ヒサシウ (久) フサシウ

ヒッパル (引張) フッパル

フロシキ (風呂敷) ヒロシキ

カゼガフク (風が吹) カゼガヒク

これ等の外、なほあるたらうが、今はこれ丈にておくとしよう。

事物は一般に、世が進歩するに従つて、益、ふけて愈複雑になるものである。

これと同時に一方には又段々簡便になるとは自然の趨勢ではあるまいか。言語のこともこの理に逆らうとは蓋、出来ないものである。昔はア# (A) であつたのが何時頃からカ#の父音はぬけてしまつてマイ (AI) と發音するやうになつた。それが又わが方言にてはヤ# (E) と發音するやうになつたのは、悪くいへば、ずるけたのであるけれども、よくいへば自然の趨勢に従つて、進歩したものといつてもよろしい。然し世の中は歴史もあり、習慣もありて、なり立つてゐるから、只理論づくめて推し通すとは出来ないといふとはあくまで承知せねばならないのである。

第二編 言語の部

言語に七ツの種類がある。名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、感動詞、これ等を七品詞といふ。別にこれ等の七品詞を補助する辭がある。之を助辭といふ。

名詞

名詞は名を表す言葉である。トイ(鳥) イナ(魚) などよふ言葉は名詞である。

代名詞

代名詞は名詞に代へて、用ふる言葉である。代名詞には人の名に代へて用ふるものと、事物、場合、方角などの名にかへて用ふるものとある。

第一、人の名に代へて用ふるもの

自身の名に代へて

オ イ(オレ、己) ワタクシ(私)

おのれが話をする人の名に代へて

ワ イ(ワレ) オ ト オマイ(オマへ)

ソナタ アナタ キコ、ウ(貴公)

自分でもなく、自分が話をする人でもなく、其の外の人の名に代へて用ふるもの

ア イ(アレ) アンヒト(アノヒト) アノオカタ

誰とも分らない人の名に代へて

ダ イ(誰) ドントヒ(ドノヒト) ドナタ

もし一人以上である場合は ドン タナ ガタ などを附くる。

オドン(オレドモ、己等) オイのイを省いていふ。

ワタクレドン(私ドモ)

ワイタチ(ワレタチ、汝等)

オツタチ(オトタチ)

オマイタチ(オマヘタチ)

ソナタガタ

アナタガタ

アイドン(アレドモ)

アンヒツタチ(アノヒトタチ)

アノオカタガタ

ダイドン(誰ドモ)

ドンヒツタチ(ドノヒトタチ)

ドナタガタ

第二、事物、場所、方角などに用ふるもの。

自分に近きのに用ふるもの

コ イ(コレ) ココ コツチ(コナラ) コンタ(コナタ)

自分が話をする人のあたりに用ふるもの

ソ イ(ソレ) ソコ ソツチ(ソナラ) ソンタ(ソナタ)

自分にも、自分が話をする人にも、遠ざかりてゐるのに用ふるもの

ア イ(アレ) アッコ(アシユ、アソコ) アッチ(アキラ)

アンタ(アナタ)

それらが分からないのに用ふるもの

ド イ(ドレ) ドコ ドッチ(ドナラ) ドンタ(ドナタ)

ナ イ(何) ナン(何) イクラ

数をいふ時には普通にイクツといふけれども、イクツといふ場合にも、イクラといふとが多いやうである。

代名詞はきつとこんあものである。これらの中にて、普通に通じないものをおいて、通ずるものゝみをあけてみよう。

自分のに代へて

ワタシ は目上にも、目下にも通じて用ふるやうである。

ワタクシ は同等以上に用ひらるゝやうである。手紙などには種

々なむつかしい語を用ふるやうであるがそれよりも、「私」などを用ふる方が、平易にして角立もせず、又使ひそこないもないやうである。

自分が話をする人のに代へて

オマエ(オマへ) はこの地方にては同等より、その以上に對しても

用ふるが、他地方にては目下のものに對してのみ用ふるから、注意しないと思はざるに人の感情をそこなふとがある。

アナア は同等以上に用ひらるゝ。

話仲間以外の人のに代へて

ア レ は敬意を表はさない場合に用ひらる。

アノヒト は稍敬意を表す場合に用ひらる。

アノオカタ は敬意を表す場合に用ひらる。

疑問の時

ダ レ は敬意を表はさない場合に用ひらる。

ドノヒト は稍敬意を表す場合に用ひらる。

ドナタ は敬意を表す場合に用ひらる。

事物などに用ひらるゝものは大概通じないものはないが、但、コイ ソイ などの イ はよく注意して レ といはねばわからない。又 ヨシナッ ナ などをも コナラ ソナラ どのやうに マッコ をも アシユア

ソコ などのいはねばわかりにくい又。ナイ、ナン あどをも ナニ といはねばならない。大阪近邊中國あたりにては ナンボ といつて イクラ といはないやうであるが、東京の方にては イクラ といつて ナンボ といはないやうである。これ等はどちらを使つてもよからうと思はる。

形容詞

形容詞は性質とか状態とかを表すとはである。シロカ、リップカ、などは形容詞である

方言の形容詞で普通に通じないのをあけてみよう

ヌツカ (アタタカイ、アツイ) (あつし、熱、あたゝかなり)

アツタカ (アツイ) 食物飲物などに用ひらるゝ

- ヒヤカ (サムイ) さむい、寒)
- コマカ (チイサイ、ホソイ) (ちいさい、小、ほそい、細)
- ホスカ (チイサイ、ホソイ) (ちいさい、小、ほそい、細)
- フトカ (オホキイ) (おほいなり、大)
- トンチカ (ト、ホイ) (とほい、遠)
- ト、ウチカ (ト、ホイ) (とほい、遠)
- ト、ウゼンナカ (サミシイ) (さびし、寂)
- ツクシカ (ウツクシイ) (うつくし、美)
- タツカ (タカイ) (たかい、高)
- キンナカ (キナイ) (きななり、黄)

ヒダ、アカ (ヒモシイ)

ヒツカ (ヒクイ) ひくい、低)

ヨクカ (Yokusa) 又ハ (Yokka) (ヨクダ) (ケチダ) (慾なり)

ヨンニ、ウカ (オ、ホイ) (おほい、多)

方言の形容詞にはいつもその語尾にカが添うている。但副詞風に使はるゝ場にはウがそゝうて引音となる。形容詞の語尾のカはカルのルを省いたものである。丁度奇麗ナルのルを省いて奇麗ナといふのと同じ理であらう。漢語を形容詞として用ふる場合にも、カを添へて、立派カ 奇麗カ 鈍カ なといふ。然し 立派ナ 奇麗ナ なども全くいはぬではない。

動 詞

動詞ははたらきを表す言葉である。間には存在を表すものもある。キバル
(働) サルク(アルク) あごははたらきを表す、動詞にて、アル(在) オル
(居)などは存在を表す動詞である。

左の方言の動詞をあけてみよう。

アユル (オケル、落) (おつ、落)

アヤス (おどす、落)

イゴク (うごく、動)

イゴカス (うごかす、動)

ウレツル (スツル) (すつ、捨)

オオオナク (アナムク) (あふぐ、仰)

クルビク (うつむく、附)

クラスル (うつ、打)

動詞の種類

動詞には語尾といふものがありて、其の形が種々ある。

今その形によりて、之を類別してみよう。

第一類 語尾に ア、イ、ウ、エ、の列の音を備へてゐるもの。

行 語 語 列
根 尾 ア 列 イ 列 ウ 列 エ 列

カ行 咲 カ キ ク ケ

ガ行 殺 ガ ギ グ ゲ

第二編 音韻の部 動詞の種類

ガ行	サ行	タ行	ダ行	ナ行	バ行	マ行	ヤ行	ラ行
擧 <small>カ</small>	馳 <small>ハ</small>	立 <small>タ</small>	出 <small>イ</small>	兼 <small>カ</small>	燻 <small>フ</small>	染 <small>ツ</small>	肥 <small>コ</small>	晴 <small>ハ</small>
グ <small>ツ</small>	ス <small>ツ</small>	ツ <small>ツ</small>	ヅ <small>ツ</small>	ヌ <small>ツ</small>	ブ <small>ツ</small>	ム <small>ツ</small>	ユ <small>ツ</small>	ル <small>ツ</small>
ゲ	セ	テ	デ	ネ	ベ	メ	エ	レ

第二編 音韻の部 動詞の種類

第一類 語尾にウエの列の音を備へてゐるもの

カ行	ワ行	ラ行	ヤ行	バ行	ナ行	タ行	サ行
受 <small>ウ</small>	買 <small>ハ</small>	降 <small>フ</small>	讀 <small>ム</small>	禿 <small>ト</small>	死 <small>シ</small>	立 <small>タ</small>	移 <small>ウツ</small>
ク <small>ツ</small>	ワ	ラ	マ	バ	ナ	タ	サ
ケ	井 <small>(イ)</small>	リ	ミ	ビ	ニ	チ	シ
	ウ	ル <small>(ウツ)</small>	ム	ブ	ヌ	ツ	ス
	エ <small>(エ)</small>	レ	メ	ベ	ネ	テ	セ

第三類 語尾はイ列音のみを備へてゐるもの

行 語尾 語尾 列イ

カ行	起	キッ
ガ行	過	ギッ
タ行	落	チッ
ダ行	振	ヂッ
ナ行	似	ニッ
ハ行	干	ヒッ
マ行	見	ミッ
ラ行	下	リッ

第四類 一種違つた語尾を備へてゐるもの

行 語根 語尾

カ行	來	キ	ク	コ
サ行	爲	シ	ス	セ

方言の動詞にて第一類のみは文語とあまり違ふとはない。只十行の「死ぬ」といふ動詞が文語にては

死 な に ぬ ぬる ぬれ

といふ語をもつのと、ワ行の動詞が皆、ハ行なるとの違のみである。

第二類の動詞は文語にては孰もウ列音にルレを添へて

受 け く くる くれ
馳 せ す する すれ

なごの様にいふけれども方言のには、只、ウ列音に促音ツが添はる計りである
第三類の動詞は文語にては二ツの種類に別れてゐる。

即「起く」落つ。なごはイ列音とウ列音がありて、其のウ列音には ル、レ
が添ふのである

落 ち つ つる つれ
起 き く くる くれ

なごの様である。又「見る」「似る」なごはイ列音にルレが添はりてゐる。

見 み みる みれ

似 に なる 似れ

第四類の動詞も矢張ウ列にルレが添はりてゐる。

來 こ き く くる くれ
爲 せ し す する すれ

これ等の外に文語にてはナ行とラ行とがあるが方言にては皆、第一類に入り
てゐる。

副 詞

副詞は動詞、形容詞、なごに副うて其の意味を定むることはである。ナカット

モンニウなどは即、副詞である。

左に方言の副詞をあげてみよう

チカット (スユシ) (わづか)

チヒット (スユシ)

ヨンニウ (タクサン) (おほく)

コギャン (コンナニ) (コノト、ホリ) (かく)

ソギャン (ソシナニ) (ソノト、ホリ)

アギャン (アンナニ) (アノト、ホリ)

ドギャン (ドンナニ) (ドノト、ホリ)

イッチョン (スユシモ) (サツバリ)

ネツカラ (ヒトツモ) (イナドモ)

メツテア (Mejiya) (メッタニ) 「メツテヤア」 (Metcha) ㄹㄱ

ふものもある」

タンキア (タシカ)

ソギャン アギャン などいふ語は

ソギャン 事 (ソシナ)

アギャン 者 (アンナ)

など形容詞にも用ひらるゝ。

これ等の外、返事に用ひらるゝことばをあげてみよう。

ナイ (ハイ、ヘイ)

ウーウ (ㄴ)

オ、オ (o)

アイ

エ、エ (e)

アイは同等以上に用ひられ、アイ ウーウ オ、オ などとは同等より以下に、エ、エ は尤も卑しいものに用ひらるゝ。

この他チイ (Mei) といふとばもあるがこれは極く下等の者より極上等の人に對していふやうである。即、多くは穢多をそが用ひてゐた様である。

インニヤ インニ は普通に イーイエ といふ語と同じ意にて、文語の イナ (否) である。インニヤ は目下に、インニ、は目上に用ふる。

接續詞

接續詞はことばをか話とかをつゞくるものである。アイドゥン ソイケン な

どは方言の接續詞である。左に例をあけてみよう。

ソイケン (ダカラ) (ソレダカラ)

アイトン (シカシ)

ソイバツテン (ソレダケレドモ)

アイバツテン (サーウデアハアルガ)

バツテン (ケレドモ) (ダケレドモ)

ソイギーイ (ソレナラ)

ソイギーイニヤアワ (ソレナラバ) サヤウデアアルナラ

感動詞

感動詞は感動した時に發することばである。ホ、オホ、オホ アリヤ などとは感動

詞である。

助辭

助辭は品詞の意味を助くるものである。

人ン キタ

サクラア サカン

右のン、タ、ア、ン、などは助辭である。が助辭のとはあとに譲るとにしよう。

形容詞の用法

一、終止法 意味のとまる場合

雲は シロカ。 (白イ) (白じ。白かり)

此は リッパカ (立派ダ) (立派なり)

孰も キレイカ (奇麗ダ) (奇麗なり)

「立派ダ」「奇麗ダ」などは「立派デアル」「奇麗デアル」といふ方が上品にあるやうである。

二、連体法 意味が名詞などにかゝる場合

シロカ 花 (白イ) 白さ

リッパカ 物 (立派ナ) 立派なる

キレイカ 器 (奇麗ナ) 奇麗なる

漢語を形容詞とする場合、即、立派とか奇麗とかいふ語を形容詞として使ふ時にもカを添へて國語的にする事が普通であるが、云ひなれぬ語は矢張ナを添へていふやうである。

三、前提法假定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の假定なるもの

シロカ・ギイ (白イナラ) (白くば)

チカカ・ナイバ (近イナラ) (近くば)

立派カ・ギイ (立派ナラ) (立派なら)

奇麗カ・ナイバ (奇麗ナラ) (奇麗なら)

「ギイ」「ナイバ」執をも添へらるゝのみならず「ギイニヤアワ」(ingaw)を「ギイ」の代にそふるともあるこれは動詞の假定を表す場合も同様である。

四、前提法確定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の確定したるもの

シロカケン (白イカラ) (白ければ)

チカカケン (近イカラ) (近ければ)

立派カケン (立派ダカラ) (立派なれば)

奇麗カケン (奇麗ダカラ) (奇麗なれば)

五、副詞法 動詞に副はる場合

ハヤ、ウ (早、ウ) (早く)

リップ、ウ (立派ニ) (立派に)

副詞法は普通語とあまり違ふ所はない、只漢語を國語風にリップ、ウをといふとあれど、これ等もごく小数の詞に限られてゐる様である。

六、接續法 他の事柄に續く場合

シロ、ウシテ (白、ウシテ) (白くて、白くシテ)

リップ・パウシテ

(立派ニシテ)

(立派にして)

キレイニシテ

(奇麗ニシテ)

(奇麗にして)

接續法も普通語とかはりはない。

七、熟語法 他の語と合ひて一語となる場合

シロ・クロカ

(白黒イ)

(白黒)

リップ・パスギル

(立派過ギル)

(立派過ぐ)

これも普通の語とかはりはない。

八、疑問法 疑問の場合

シロカ・カ。

(白イカ)

(白きか)

リップ・パカ・カ。

(立派ダカ)

(立派なるか)

キレイカ・カ。

(奇麗ダカ)

(奇麗なるか)

第一類動詞の法

一、終止法 意味の止まる場合、ウ列音をもつて止むると文語も同様である。

花ガ

サク。

(咲く)

人ガ

タツ。

(立つ)

猫ガ

シヌ。

(死ぬ)

鳥ガ

トブ。

(飛ぶ)

雨ガ

ヤム。

(止む)

雨ガ フッ。フーウ (降る)
 人に アウ。 (逢ふ)

右の中、ラ行のみが一種特別である。此の種の動詞に限りラ行のルが其のまゝに發音されないで促音、又は引音に發音さるゝ、即、東部地方は促音を用ひ、西部地方は引音を用ふる様である

雨ガ フッ。フーウ (降ル) (降る)
 池を ホッ。ホーウ (堀ル) (堀る)
 魚を ツッ。ツーウ (釣ル) (釣る)
 枝を オッ。オーウ (折ル) (折る)

二、連体法名詞なきにかゝる場合、ウ列音を用ふると矢張、文語に同じい

サク 時
 タツ 時
 シヌ 時 (死ぬる)
 トブ 時
 ヨム 時
 フッ。フーウ 時 (降る)
 アウ 時 (逢ふ)

右の中、ナ行の「シヌ」は文語にてはこの類の動詞でない。又「アウ」はハ行である。ラ行が特に促音(東部地方)引音(西部地方)に變はると終止法に同じい。

雨が フッ。フーウ 時
 池を ホッ。ホーウ 時
 魚を ツッ。ツーウ 時
 枝を オッ。オーウ 時

三、前提法假定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の假定なるもの。
 終止法に「ギイ」又は「ナイバ」を添ふ。

花の サクギイ (咲クナラ) (咲かば)
 人が タツギイ (立ツナラ) (立たば)
 猫が シヌギイ (シヌナラ) (死なば)
 鳥が トブギイ (トブナラ) (飛ばば)

本を ヨムギイ (ヨムナラ) (讀まば)

雨の フツギイ、フーウギイ (フルナラ) (降らば)

人に アウギイ (アウナラ) (逢はば)

ギイの代にナイバをもとふる。

サクナイバ タツナイバ トブナイバ

ヨムナイバ フツナイバ フーナイバ

ラ行が促音(東部)又は引音(西部)であるとはこの法にて同じい。

四、前提法確定 他の事柄の前提となる場合而して其の意の確定したるもの
 終止法に「ケン」を添ふ。

花が サクケン (サクナラ) (咲けば)

人^ガ タツケン (タツカラ) (立てば)

猫^ガ シヌケン (シヌカラ) (死ぬれば)

鳥^ガ トブケン (トブカラ) (飛べば)

本^ヲ ヨムケン (ヨムカラ) (讀めば)

雨^ガ フツケン。フーウケン (フルカラ) (降れば)

人^ニ アウケン (アウカラ) (逢へば)

五、熟語法 他の詞と合うて一語となる場合

カキ・ハジムル ウチ・コロス

など大概文語に同じい。但、場合により促まることがある。

カッ・カケタ (カキ、カケテ)

ラ行はりがイはかはる

ツイソコナウ (ツリソコナフ)

カイナチス (カリナホス) (借り直す)

ヨイヤウ (ヨリアウ) (寄り合ふ)

六、名詞法 名詞として使はるゝ場合、終止法にトを添ふ。

ユクトハ ヤスカ (ユクノハ) (行くは)

ヨムトチ キイタ (ヨムノチ) (讀むを)

トブトバ ミロ (トブノチ) (飛ぶをば)

七、命令法 動作を命令する場合 文語に同じい。

ユケ タテ ヨメ ツレ

禁止の場合にも

ユクナ タツナ

なほ多くは文語と同じいが、只、ラ行たけが

ツンナ(釣ルナ) フンナ(降ルナ)

トルはンにかはる

東京邊にては動詞の上におを副へてイ列音を命令法に用ふるとがある。

オ・ヨミ オ・ヨシ オ・アガリ

八、疑問法 問ひかくる場合 ウ列音にカを添ふると文語に同じい

サクカ。 カスカ。 シヌカ。 トブカ。

ヨムカ。 ツツカ。 ツーカ。 カウカ

カ行のクは強き音につゞく場合には、其の母音がぬけて、促音に發音さるる場合が多い。即、サッケン、(Sake)、サッカ(Saka)、などの様に發音さるる。

第二類動詞の法

一、終止法 ウ列音に促音ツをつくる。

賞を ウクツ。 (ウクル) (受く)

石を アクツ。 (アグル) (舉ぐ)

馬が ハスツ。 (ハスル) (馳す)

家を タツツ。 (タツル) (建つ)

職を カヌツ。 (カヌル) (兼ね)

竹を フスブッ。(フスブル) (燻ぶ)

髪を ソムッ。(ソムル) (染む)

体が コユッ。(コユル) (肥ゆ)

九州以外にはかくエ、ウの語尾を持つてゐる動詞を使ふ所は少ない。この種の動詞は其のエ列音にルをそへて ウケル サ、ゲル ハセル などのふ。

二、連体法 終止法と同じ。

ウクッ時 (ウクル) (受くる)

ササグッ時 (サ、グル) (捧ぐる)

ハスッ時 (ハスル) (馳する)

タツッ時 (タツル) (建つる)

カヌッ時 (カヌル) (兼ねる)

フスブッ時 (フスブル) (燻ぶる)

ソムッ時 (ソムル) (染むる)

コユッ時 (コユル) (肥ゆる)

文語にては終止法の形と違つてをる。

三、前提法假定 終止法の形にギイを添ふる。

ウクッギイ (ウクルナラ) (受けば)

ササグッギイ (サ、グルナラ) (捧げば)

ハスッギイ (ハスルナラ) (馳せば)

タツッギイ

(タツルナラ)

(建てば)

ソムッギイ

(ソムルナラ)

(染めば)

コユッギイ

(コユルナラ)

(肥むば)

「ギイ」の代に「ナイバ」をも用ふる。その場合には語尾の促音ツの代にンを添ふる。

ウクンナイバ

ササグンナイバ

ハスンナイバ

タツンナイバ

ソムンナイバ

コユンナイバ

四、前提法確定 終止法の形にケンを添ふる。

ウクッケン

(ウクルカラ)

(受くれば)

ササグッケン

(サ、グルカラ)

(捧ぐれば)

ハスッケン

(ハスルカラ)

(馳すれば)

タツッケン

(タツルカラ)

(建つれば)

ソムッケン

(ソムルカラ)

(染むれば)

コユッケン

(コユルカラ)

(肥ゆれば)

五、熟語法 エ列音より續くると文語と同じい。

ウケ。トル

タテ。ハジム

コエ。フトル

六、名詞法 終止法の形にトを添ふる。

ソムットチ

カウ

(ソムルノチ)

(染むるを)

コユットチ

キラウ

(コユルノチ)

(肥ゆるを)

ハル ットチ マツ (ハル、ノチ) (晴るゝを)
 ツトム ットハ ナイ (ツトムルノハ) (勉むるは)
 七、命令法 エ列音にロを添ふる。

ウケロ (受けよ)
 サ、ゲロ (捧げよ)
 ハセロ (馳せよ)
 ソメロ (染めよ)
 コエロ (肥ゆる)

禁示の場合には矢張ルガんに變りて

ウクンナ(受クルナ) ソムンナ(染ムルナ)

といふ。以下三類四類の動詞皆同じい。

この種の動詞も東京邊にては上にオを副へて命令法にエ列音を用ふることがある。

オ・ウケ オ・イデ オ・タビ オ・ヤメ

八、疑問法 終止法の形にカを添ふる。

ウク ッカ (受くるか)
 タツ ッカ (建つるか)
 カヌ ッカ (兼ねるか)
 ソム ッカ (染むるか)
 コユ ッカ (肥ゆるか)

第三類動詞の法

一、終止法 イ列音に促音ツを添ふる。

早く オキッ。 (オキル) (起く)

そこを スギッ。 (スギル) (過ぐ)

柿が オチッ。 (オチル) (落つ)

手を ネヂッ。 (チヂル) (振つ)

人に ニッ。 (ニル) (似る)

着物が ヒッ。 (ヒル) (干る)

人に コビッ。 (コビル) (媚が)

月を ミッ。 (ミル) (見る)

釣を ココロミッ。 (コロミル) (試む)

二階を オリッ。 (オリル) (下る)

豊前豊後地方にては、文語同様にウ列音に オクル オツル コブル オル、なごいふ様である。然し文語のやうにイ、ウ列の語尾のみではなくてエウ列の語尾のがある。即、オツ(テ) オル(レ) などが多い。

二、連体法 終止法と同じ形である。

オキッ 時 (オキル) (起くる)

オチッ 時 (オチル) (落つる)

ミッ 時 (ミル) (見る)

キッ時

(キル)

(着る)

オリッ時

(オクル)

(下る)

文語にては終止法の形と違つてゐる。

三、前提法假定 終止法の形に「ギイ」を添ふる。

オキッギイ

(オキルナラ)

(起きば)

オチッギイ

(オチルナラ)

(落ちば)

ミッギイ

(ミルナラ)

(見ば)

ニッギイ

(ニルナラ)

(似ば)

オリッギイ

(オリルナラ)

(下りば)

「ギイ」の代に「ナイバ」を添へて假定を表すともある。その場合には語尾

の促音ガんに變ると第二類の場合と同様である。

オキンナイバ

オチンナイバ

ミンナイバ

ニンナイバ

四、前提法確定 終止法の形に「ケン」を添ふる。

オキッケン

(オキルカラ)

(起くれば)

オチッケン

(オチルカラ)

(落つれば)

ミッケン

(ミルカラ)

(見れば)

ニッケン

(ニルカラ)

(似れば)

オリッケン

(オリルカラ)

(下るれば)

五、熟語法 文語と同じ。

オキ。アガル オチ。ソコナウ
六、名詞法 終止法の形に「ト」を添ふる。

オリットチ ミタ (オリルノチ) (下るゝを)

ツキットチ マツ (ツキルノチ) (盡くるを)

オチットチ ヒロウ (オチルノチ) (落つるを)

七、命令法 イ列音に口を添ふる。

オキ口 (起きよ)

チチ口 (落ちよ)

ミ口 (見よ)

ニ口 (似よ)

オイ口 (おりよ)

ラ行のりはイ變へていふ。

この種の動詞も東京邊にてはイ列音をそのままに用ふるとがある

オ・オキ オ・ミ オ・オリ

八、疑問法 終止法の形に「カ」を添ふる。

オキッカ (オキルカ) (起くるか)

オチッカ (オチルカ) (落つるか)

コビッカ (コビルカ) (媚ぶるか)

ミッカ (見るか)

ニッカ (似るか)

オリッカ

(オリルカ)

(下るゝか)

第四類動詞の法

一、終止法

人が クッ

(クル)

(く)

仕事を スッ

(スル)

(す)

二、連体法

クッ時

(クル)

(來る)

スッ時

(スル)

(爲る)

三、前提法假定

クッギイ

(クルナラ)

(こぼ)

スッキイ

(スルナラ)

(せば)

クンナイバ

スンナイバ

四、前提法確定

クッケン

(クルカラ)

(來れば)

スッケン

(スルカラ)

(爲れば)

五、熟語法

キ・カクル

シ・ハジム

六、名詞法

七、命令法

- クツトチ キラウ (クルノチ) (来るを)
- スツトワ ナカ (スルノハ) (爲るは)

コイ (こよ、こ)

セロ (せよ)

これも オ・キ オ・シ など用ふることがある。

八、疑問法

クツカ (くるか)

スツカ (するか)

この外、動詞の命令法に、一種特別なものがある。多くは東部地方に行は

る語にて、目下に向ひ使はるゝ。

- 一、イカイ(行け) ヨマイ(讀め) ツライ(釣れ)
- 二、ウケサイ(受けよ) カエサイ(代へよ)
- 三、オキサイ(起きよ) ミサイ(見よ)
- 四、キサイ(こよ) サイ(せよ)

又、クル 來 といふ動詞に限ぎり

コライ 來よ

といふものもある一般には行はれない様である。

又、禁示を表す時はこれに「ナ」を添へて

- 一、イカイナ(行くな) ヨマイナ(讀むな)

- 二、ウケサイナ(受くな) カエサイナ(代ふな)
- 三、オキサйна(起くるな) ミサイナ(見るな)
- 四、キサйна(來な) サйна(すな)

とスル

此の發音はサイと助辭は鼻にかけて發音する。

- 1. inkai, yonwai,
- 2. ukensai, Kansai.
- 3. Okinsai, minsai,
- 4. Kinsai, nsei,

助 辭

助辭を二つに別けて、法なもつてをるものとまたないものと二つにする。前

のを助辭といひ、後のを單に助辭といふ。

助 動 辭

助動辭は法を持つてをる助辭である。助動辭には動詞につく者、形容詞につくもの又は名詞、代名詞等につくものもある。

一、スツ サスツ は文語の ス サス と同じもので他をして、なとする意を表ものである

- 答を イワスツ。(イハスル) (云はす)
- 塵を ステサスツ。(ステサスル) (捨てさす)
- 早く オキサスツ。(オキサスル) (起きさす)

人に コラス^ッ。

(來さす)

事を サス^ッ。

(サスル)

(爲さす)

二、ルッラルッ は文語の ルラル と同じもので、他とかけらるゝ意を表するものである。

人から ワラワ^ルル^ッ。

(ワラハ^ルル)

(笑はる)

人から ステ^ラル^ッ。

(ステラルル)

(捨てらる)

人から ミ^ラル^ッ。

(ミラルル)

(見らる)

人から コ^ラル^ッ。

(コラルル)

(こらる)

人から アイセ^ラル^ッ。(アイセラルル)

(愛せらる)

三、ン は文語の ズ と同じもので、打消す意を表するものである。

ヨマン

(ヨマヌ、ナイ)

(讀まず)

ステン

(ステヌ、ナイ)

(捨てず)

オキン

(オキヌ、ナイ)

(起きず)

コン

(コヌ、ナイ)

(こず)

セン

(セヌ、セナイ)

(せず)

四、ウ は文語の ム と同じもので想像の意を表すものである。

ヨマーウ (Mo)

(讀まむ)

ステーウ (Situ)

(ステョーウ)

(捨てむ)

オキーウ (Okiu)

(オキョーウ)

(起きむ)

コーウ (Ke)

(コョーウ)

(來む)

セーウ (su) (シーヨウ)

せむ

エ列音にウが添うて引音に發音さるゝ場合には、音韻の部に述べておいた様に、イーウ (ユーウ) と發音さるゝ。即、ステーウは スナーウ、ヤミーウ ューヤミーウ、アテーウ アナーウ、セーウ シーウ、又、オウ ウーウ であるから ユーウ クーウ と發音さるゝのである。

五、タ (ダ) は文語の ヌ タリ キ などと同じ意にて動作の過ぎた意に用ひらるゝものである。

キヤーアタ (カイト)

(書きぬ、き)

ステタ

(捨てぬ、き)

オキタ

(起きぬ、き)

キタ

(かぬ、き)

シタ

(しぬ、き)

第一類の動詞にタが添はる場合には動詞の發音が行によりて、種々に變る。

カ行 キヤーアタ

(カイト)

(書きぬ、き)

サ行 シヤーアタ

(サイタ)

(咲きぬ、き)

タ行 タッタ

(立ちぬ、き)

ナ行 シンダ

(死にぬ、き)

バ行 トンダ

(飛ひぬ、き)

マ行 ヨンダ

(讀みぬ、き)

ラ行 ツッタ

(釣りぬ、き)

ワ行 カウタ

(買ひぬ、き)

右の様にカ行とサ行とはイ列音の父音がぬけてイとなり、そのイが上の音と合して、拗音の引音に發音さるゝが通常である、今、試みに羅馬字を綴つみよう。

KAKi-ta, Kaita, KYā-ta. Ai=yā
 MASi-ta, Mai-ta, MYā-ta, Ai=yā
 TOKi-ta, toi-ta, tā-ta, Oi=ē
 KOSi-ta, Koi-ta, Ke-ta, Oi=ē
 KIKi-ta, Kii-ta, Ki-ta, I=i
 SEKi-ta, Sei-ta, Sē-ta, ei=ē
 UKi-ta, ui-ta, I-ta, ui=wēē
 MUKi-ta, Mui-ta, MI-ta, mi=i

即、アイはヤア、イイはイイイ、ウイはイイイ、又は井イイ、エイ、オイは

エーエと發音さるゝと、音韻の部にてのべた通である。

タ行とラ行とは其の母音がぬけて、父音が促音に發音さるゝのは普通である。

ナ行とバ行とマ行とは其の母音がぬけて、父音が發音に發音さるゝのも、亦普通である。而してかゝる場合にはタはダと變るのである。

バ行とマ行とラ行とは又引音に發音さるゝとがある。即、トウウ(飛)ダ ヨウウ(讀)ダ オモウ(思)ダ などの様である。バ行、マ行は引音に發音さるゝ場合にも矢張、タはダに變る。

ワ行は關西にては引音に發音さるゝとか多いやうであるけれども、關東にては促音に發音さるゝやうである。即、思ッテ 云ッテ 買ッテ などを發音さるゝ。

序に、クウ (食) といふ動詞は一種特別に云はるゝやうであるが、この動詞の語が ルッ、スッ、ン、ウ、などにつゞく場合には クッルッ、クッスッ、クッン、クッウ、とクワが常に拗音に發音さるゝことが多い。又、タにつゞく場合にはクウタとなるべき筈なれど特別にウを省いて單にクタといふことが多いやうである

六、トットウ は文語の タリ などと同じ意にて、動作の打ち續く場合とか或は結果が残つてゐる場合に用ひらるゝ。トッは東部地方に重に行はれ、トウは西部地方に用ひらるゝ様である。

花が シャアトッ、トウ (サイテ井ル) (咲きたり)

雨は ハレトッ、トウ (ハレテ井ル) (晴れたり)

孰も オキトッ、トウ (オキテ井ル) (起きたり)

人が キトッ、トウ (キテ井ル) (來たり)

トウが動詞に續くのはタが動詞に續くのと同じさまである。

七、タラウ は文語の ムラム ケム など、同じ意にて過去の想像に用ひらるゝ。

花が シャアタラウ (サイタラウ) (咲きけむ)

雨は ハレタラウ (咲きぬらむ)

人は オキタラウ (起きけむ)

孰も キタラウ (きぬらむ)

タラウはタといふ過去の助動辭にラウといふ想像の辭が添うたのであ

八、トラウ は文語の タラム と同じ意にて トットウ の想像である。

花が シャアトラウ (サイテナラウ) (咲きたらむ)

雨は ハレトラウ (ハレテナラウ) (晴れたらむ)

人は オキトラウ (オキテナラウ) (起きたらむ)

孰も キトラウ (キテナラウ) (來たらむ)

九、ゴザッ (東部) ゴザア (西部) ゴザルの訛 文語の タマフ など、

同じく他の人の動作を敬ひていふ時に用ひらるゝ

書を ヨミゴザッ、ゴザア (讀みたまふ)

塵を ステゴザッ、ゴザア (捨てたまふ)

早く オキゴザッ、ゴザア (起きたまふ)

皆 キゴザッ、ゴザア (來たまふ)

「ゴサッ」「ゴザア」が「リ」に續く時には「リ」はイに變る。

トイゴザッ (取りゴザル) ツイゴザッ (釣リゴザル)

カイゴザッ (借リゴザル) オイゴザッ (下リゴザル)

間には「レ」に續く時「レ」が「イ」に變るともある。

クイゴザッ (クレゴザル)

十、ンサッ 東部 (ンサー) (西部) ナサルの訛 これもまた敬意を表する

語である。

書を ヨミ・ンサツ・ンサーア
塵を ステ・ンサツ・ンサーア
早く オキ・ンサツ・ンサーア
皆 キ・ンサツ・ンサーア

「ンサーア」が「リ」の語尾を持ちたる動詞に續く時には「リ」を省きて、直に其の語根に續く。

ト・ン・サツ (取りナサル)

ツ・ン・サツ

(釣りナサル)

カ・ン・サツ (借りナサル)

オ・ン・サツ

(居りナサル)

間にはレに續く時にも省かる。

ク・ン・サツ (クレナサル)

「ンサーア」のみでは目下の者に対して用ひらるゝけれども (但現在は同等にも用ふると稍、流行せり) 動詞の上に「オ」を添へて

オ・ヨミ・ンサツ・ンサーア

オ・ステ・ンサツ・ンサーア

オ・オキ・ンサツ・ンサーア

などいふ場合には目上の人に対して用ひらるゝ上等な言葉である。併、この「オ」はどんな動詞にもつくとはいへない。

假令ば オ・來ンサツ「オ・シンサツ」などはいはずして オ・出^{イダ}ンサツ ナサツ

なさいふ

十一、ナ^ナア も ナサル^{ナサル}の訛 また敬意を表はすものであるナ^ナアは ナ

と促音に發音するノともある。

書を ヨミ・ナリア

塵を ステ・ナリア

早く オキ・ナリア

皆 キ・ナリア

「ナリア」は「ンサッ」「ンサマ」と同じ場合に用ひらるゝけれども、一般に用ひられない。鹿島附近に重に用ひらるゝ様である。

十二、ミヤリア (Mia) は文語の マシ と同じ意である。

私は ユク・ミヤア (ユクマイ) (行くまじ)

本は ヨム・ミヤア (ヨムマイ) (讀むまじ)

「ミヤア」が動詞の語尾「ル」に續く時はその「ル」は常に「ン」に變る

雨は フン・ミヤア (フルマイ) (降るまじ)

是は ウク・ンミヤア (ウクルマイ) (受くまじ)

私は オキ・ンミヤア (オキルマイ) (起くまじ)

誰も クン・ミヤア (クルマイ) (くまじ)

何も スン・ミヤア (スルマイ) (すまじ)

十三、ゴタッ (東部) ゴタア (西部) ゴトアルの訛 文語の ヨドシ と同

じ意である。

人の ユクゴタッ、ゴタア (行くごとじ)

山の クヅルッゴタッ、ゴタア (崩るゝごとじ)

誰か クツ。ゴタツ、ゴターア

(くるごとと)

音は カノ。ゴタツ、ゴターア

(蚊のどとと)

高さ ヤマン。ゴタツ、ゴターア

(山のどとと)

「ゴタツ」「ゴターア」が動詞に續く時は終止法の形に添ふ。名詞に續く時は、二音以上の名詞には「ン」より受け。

山^{ヤマ}ン。ゴタツ、

人^{ヒト}ン。ゴタツ、

一音の名詞、又は母音鼻音を以て終る名詞には「ノ」より受く

蚊^カノゴタツ、

齒^カノゴタツ、

毛^ケノゴタツ、

犀^{サイ}ノゴタツ、

豹^{ヒヤク}ノゴタツ、

牛^{ウシ}ノゴタツ、

判^{ハン}ノゴタツ、

天^{テン}ノゴタツ、

北京^{ペキン}ノゴタツ、

代名詞のヨイ (是) ソイ (其) アイ (彼) ダイ (誰) ドイ (ドレ) など

續く時は「ガ」より添ふ。

コイガ。ゴタツ アイガ。ゴタツ

十四、デガッス デゴザリマスの訛 文語の ナリ と同じ意にて指定する

語である、但、敬意を含みてゐる。

即、ニ侍り ニテ候 と同じい、名詞、代名詞に添ふ。

(ユノ語は西部にのみ通用して東部にてはいはない)。

山^{ヤマ}。デガッス (山デアリマス)

(山にて候)

私^シ。デガッス

(私デアリマス)

(私にて侍り)

十五、ゴザッス ガッス と同じ意にて ガッス よりも上等な言葉である

山・デゴザッス (山デゴサイマス)

私・デゴザッス (私デゴザイマス)

「ゴザッス」を今、一段上等にいふ時には「ゴザイマス」といふ。

十六、 ジャマ 文語の ナリ と同じ意である。

山・ジャア (山ダ) (山なり)

私・ジャア (私ダ) (私なり)

十七、 マッスンゴザーマ (Massungozā) マッセンゴザーマ (Massengozā) 共に敬意

を表す言葉である。これも西部にて多く用ひらるゝ様である。

ヨミ・マッスンゴザーマ (ヨミマッスンゴザイマス)

ステ・マッスンゴザーマ (ステマッスンゴザイマス)

キ・マッスンゴザーマ (キマッスンゴザイマス)

ヨミ・マッセンゴザーマ (ヨミマッセンゴザイマス)

ステ・マッセンゴザーマ (ステマッセンゴザイマス)

キ・マッセンゴザーマ (キマッセンゴザイマス)

助動辭の法

第一、 スッ サスッ

終止法

クワスッ (クハスル) (食はず)

ステサスッ (ステサスル) (捨てさず)

オキサスッ。(オキサスル) (起きさせる)

連体法

クワスッ時 (クハスル) (食はする)

ステサスッ時 (ステサスル) (捨てさせる)

オキサスッ時 (オキサスル) (起きさせる)

前提法假定

クワスッギイ (クハスルナラ) (食はせば)

ステサスッギイ (ステサスルナラ) (捨てさせば)

オキサスッギイ (オキサスルナラ) (起きさせば)

又「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふる時は語尾の「ッ」「ガ」「ン」に變りて

左の如くなる。

クワスンナイバ ステサスンナイバ

オキサスンナイバ

前提法確定

クワスッケン (クハスルカラ) (食はすれば)

ステサスッケン (ステサスルカラ) (捨てさせれば)

オキサスッケン (オキサスルカラ) (起きさせれば)

熟語法

クワセスギル ステサセチル

命令法

クワセロ。
 ステサセロ。
 オキサセロ。

疑問法

クワスツカ。
 ステサスツカ。
 オキサスツカ。

第二、ルツ、ラルツ

終止法確定

クワルツ

(食はせよ)
 (捨てさせよ)
 (起させよ)

(食はするか)
 (捨てさせるか)
 (起させるか)

クワルツ

(クハルル)

(食べる)

ステラルツ

(ステラルル)

(捨てらる)

連体法

クワルツ時

(食はる)

ステラルツ時

(捨てらる)

前提法假定

クワルツギイ

(クハルルナラ)

(食はれば)

ステラルツギイ

(ステラルルナラ)

(捨てられば)

「ギイ」の代に「ナイツ」添ふれば「ツ」が「ン」に變ると「スツ」「サスツ」に同じ。

前提法確定

クワルッケン、

(クハルルカラ)

(食はるれば)

ステラルッケン、

(ステラルルカラ)

(捨てらるれば)

熟語法

クワレカ、ル

ステラルハジム

命令法

クワレロ。

(食はれよ)

ステラレロ。

(捨てられよ)

疑問法

クワルッカ。

(食はるか)

ステラルッカ。

(捨てらるか)

第三、ン

終止法

ヨマン

(ヨマナイ、ヌ)

(讀まず)

ステン

(ステナイ、ヌ)

(捨てず)

オキン

(オキナイ、ヌ)

(起きず)

連体法

ヨマン時

(ヨマナイ、ヌ)

(讀まぬ)

ステン時

(ステナイ、ヌ)

(捨てぬ)

オキン時

(オキナイ、ヌ)

(起きぬ)

前提法假定

ヨマンギイ (ヨマヌナラ) (讀まずば)
 ステンギイ (ステヌナラ) (捨てずば)
 オキンギイ (オキヌナラ) (起きずば)
 「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふれば

ヨマンナイバ ステンナイバ オキンナイバ
 前提法確定

ヨマンケン (ヨマヌカラ) (讀まねば)
 ステンケン (ステヌカラ) (捨てねば)
 オキンケン (オキヌカラ) (起きねば)

接續法

ヨマジイ (ヨマズニ、ナイデ) (讀まずして)
 ステジイ (ステズニ、ナイデ) (捨てずして)
 オキジイ (オキズニ、ナイデ) (起きずして)

疑問法

ヨマンカ (ヨマヌカ、ナイカ) (讀まぬか)
 ステンカ (ステヌカ、ナイカ) (捨てぬか)
 オキンカ (オキヌカ、ナイカ) (起きぬか)

第四、ウ

終止法

ヨマーウ (ヨマーウ) (讀まむ)

ステーウ (チーウ)

(ステヨウウ)

(捨てむ)

オキーウ

(オキヨウウ)

(起きむ)

ミーウ

(ミヨウウ)

(見む)

コーウ (シューウ)

(キヨウウ)

(來む)

セーウ (シューウ)

(シヨウウ)

(爲む)

「エーウ」も「イーウ」も引音に發音する時には「エ」の引音「ユウ」に變るとは音聲の部に述べたる通である。そこで

テーウ は チョウ セーウ は ショウ

と發音さるゝのである。

又、「オーウ」はウの引音「ウーウ」と發音さるゝから

コーウ は クーウ

と發音さるゝのである

前提法確定

ヨマーウケン、

(ヨマウカラ)

(讀むべければ)

ステーウケン、

(ステヨウカラ)

(捨つべければ)

オキーウケン、

(オキヨウカラ)

(起くべければ)

疑問法

ヨマーウカ、

(讀まむか)

ステーウカ、

(ステヨウカ)

(捨てむか)

オキーウカ、

(オキヨウカ)

(起きむか)

第五、タ(ダ)

終止法

キヤアタ

(カイタ)

(書きぬ、か)

ステタ

(ステタ)

(捨てぬ、き)

オキタ

(オキタ)

(起きぬ、せ)

連体法

キヤアタ時

(カイタ)

(書きぬる、じ)

ステタ時

(ステタ)

(捨てぬる、じ)

オキタ時

(オキタ)

(起きぬる、じ)

前提法假定

キヤアタナイバ

(カイタナラ)

(書きなば)

ステタナイバ

(ステタナラ)

(捨てなば)

オキタナイバ

(オキタナラ)

(起きなば)

前提法確定

キヤアタケン

(カイタカラ)

(書きぬれば、じかば)

ステタケン

(ステタカラ)

(捨てぬれば、じかば)

オキタケン

(オキタカラ)

(起きぬれば、じかば)

接續法

キヤアテ

(カイテ)

(書きて)

ステテ

(捨て)

オキテ

(起きて)

疑問法

キヤアタカ

(カイタカ)

(書きぬるか、じか)

ステタカ

(捨てぬるか、じか)

オキタカ

(起きぬるか、じか)

第六、トウウ(ドゥウ) トツ(ドツ)

終止法

キヤアトツ、トウウ。

(カイテナル、テ井ル)

(書けり)

ステトツ、トウウ。

(ステテナル、テ井ル)

(捨てたり)

オキトツ、トウウ。

(オキテナル、テ井ル)

(起きたり)

連体法

キヤアトツ、トウウ時

(カイテナル、テ井ル)

(書ける)

ステトツ、トウウ時

(ステテナル、テ井ル)

(捨てたる)

オキトツ、トウウ時

(オキテナル、テ井ル)

(起きたる)

前提法假定

キヤアトツ、ギイ

(カイテナルナラ)

(書きたれば)

ステトツ、ギイ

(ステテナルナラ)

(捨てたれば)

オキトツ、ギイ

(オキテナルナラ)

(起きたれば)

「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふる時には

キヤアトンナイバ

ステトンナイバ

となる

前提法確定

キヤアトッケン

(カイトナルカラ)

(書きたれば)

ステトッケン

(ステテナルカラ)

(捨てたれば)

オキトッケン

(オキテナルカラ)

(起きたれば)

方言の傍そばにて「トッ」の代に「トウ」を添ふるとあるは假定、確定とも同じ即

キヤアトウギイ

キヤアトウナイバ

キヤアトウケン

又、普通口語の傍そばにて、「テナル」の代に「テ井ル」を添ふるとも假定、確

定とも同じい。即

カイト井ルナラ

カイト井ルカラ

接續法

キヤアトッテ

(カイトナリテ、テ井テ)

ステトッテ

(ステテナリテ、テ井テ)

オキトッテ

(オキテナリテ、テ井テ)

疑問法

キヤアトッカ

(カイトナルカ)

(書きたるか)

ステトッカ

(ステテナルカ)

(捨てたるか)

オキトッカ

(オキテナルカ)

(起きたるか)

又、方言にて「トウ」を添ふれば

キヤアトウカ ステトウカ オキトウカ

普通口語にて「テ井ル」を添ふれば

カイテ井ルカ ステテ井ルカ オキテ井ルカ

第七、タラウ(ダラウ)

終止法

キヤアタラウ (カイタラウ) (書きぬらむ、けむ)

ステタラウ (捨てぬらむ、けむ)

オキタラウ (起きぬらむ、けむ)

前提法確定

キヤアタラウケン (カイタラウカラ)

ステタラウケン (ステタラウカラ)

オキタラウケン (オキタラウカラ)

疑問法

キヤアタラウカ (カイタラウカ) (書きぬらむか)

ステタラウカ (捨てぬらむか)

オキタラウカ (起きぬらむか)

第八、トラウ(ドラウ)

キヤアトラウ (カイテナラウ) (書きたらむ)

ステトラウ (ステテナラウ) (捨てたらむ)

オキトラウ

(オキテナラウ)

(起きたらむ)

前提法確定

キヤアトラウケン

(カイテナラウカラ)

ステトラウケン

(ステテナラウカラ)

オキトラウケン

(オキテナラウカラ)

疑問法

キヤアトラウカ

(カイテナラウカ)

(書きたらむか)

ステトラウカ

(ステテナラウカ)

(捨てたらむか)

オキトラウカ

(オキテナラウカ)

(起きたらむか)

第九、ゴザッ、ゴザア

終止法

カキゴザッ。ゴザア

(書き給ふ)

ステゴザッ。ゴザア

(捨て給ふ)

オキゴザッ。ゴザア

(起き給ふ)

連名法

カキゴザッ。ゴザア時

(書き給ふ)

ステゴザッ。ゴザア時

(捨て給ふ)

オキゴザッ。ゴザア時

(起き給ふ)

前提法假定

カキゴザッ。ゴザア、ギイ、ナイバ

(書き給はゞ)

ステゴザッ、ゴザア、ギイ、ナイバ (捨て給はゞ)
オキゴザッ、ゴザア、ギイ、ナイバ (起き給はゞ)

前提法確定

カキゴザッケン、ゴザアケン (書き給へば)
ステゴザッケン、ゴザアケン (捨て給へば)
オキゴザッケン、ゴザアケン (起き給へば)

命令法

カキゴザイ (書き給へ)
ステゴザイ (捨て給へ)
オキゴザイ (起き給へ)

疑問法

カキゴザッカ、ゴザアカ (書き給ふか)
ステゴザッカ、ゴザアカ (捨て給ふか)
オキゴザッカ、ゴザアカ (起き給ふか)

第十、ンサッ、ンサア

終止法

カキンサッ、ンサア
ステンサッ、ンサア
オキンサッ、ンサア

連体法

カキンサッ、ンサーア時
ステンサッ、ンサーア時
オキンサッ、ンサーア時

前提法假定

カキ・ンサッギイ、ンサーアギイ
ステ・ンサッギイ、ンサーアギイ
オキ・ンサッギイ、ンサーアギイ

「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふるも同じい。

前提法確定

カキンサッケン、サーアケン

ステンサッケン、サーアケン
オキンサッケン、サーアケン

命令法

カキンサイ
ステンサイ
オキンサイ

疑周法

カキンサツカ、サーアカ
ステンサツカ、サーアカ
オキンサツカ、サーアカ

第十一、ナリア

終止法

カキナリア

ステナリア

連体法

カキナリア

ステナリア

前提法假定

カキナリアギイ

ステナリアギイ

前提法確定

カキナリアケン

ステナリアケン

命令法

カキナイ

ステナイ

オキナイ

疑問法

カキナリアカ

ステナリアカ

第十二、ミヤア

終止法

- カクミヤア (カクマイ) (書くまじ)
- スツンミヤア (スツルマイ) (捨つまじ)
- オキンミヤア (オキルマイ) (起くまじ)
- クンミヤア (クルマイ) (くまじ)
- スンミヤア (スルマイ) (すまじ)

前提法確定

- カクミヤアケン (カクマイカラ) (書くまじければ)
- スツンミヤアケン (スツルマイカラ) (捨つまじければ)

オキンミヤアケン (オキルマイカラ) (起くまじければ)

疑問法

- カクミヤアカ (カクマイカ) (書くまじきか)
- スツンミヤアカ (スツルマイカ) (捨つまじきか)
- オキンミヤアカ (オキルマイカ) (起くまじきか)

第十三、ゴダッ、ゴターア (ゴターアの法ゴダッと同じ、故に畧す)

終止法

- カクゴダッ (カクヤウダ) (書くごと)
- 山ゴダッ (山ノヤウダ) (山のごと)

連体法

ヨムゴタツ 聲

(ヨムヤウナ)

(讀むことば)

山ンゴタツ者

(山ノヤウナ)

(山のごとく)

前提法確定

イウゴタツギイ

(イウヤウナラ)

(云ふことば)

山ンゴタツギイ

(山ノヤウナラ)

(山のごとくば)

前提法假定

イウゴタツケン

(イフヤウダカラ)

(云ふことくなれば)

山ンゴタツケン

(山ノヤウダカラ)

(山のごとくなれば)

副詞法

イウゴト

(イウヤウニ)

(云ふごとく)

山ンゴト

(山ノヤウニ)

(山のごとく)

接續泣

イウゴトシテ

(イウヤウニシテ)

(云ふごとくして)

山ノゴトシテ

(山ノヤウニシテ)

(山のごとくして)

第十四、デガッス デゴサッス

終止法

山デガッス

(山デス)

私デゴサッス

(私デゴサイマス)

連名法

山デガッスッ時

(山デス)

私デゴザッスッ時

(私デゴザイマス)

前提法假定

山デカッスッギイ

(山デスナラ)

山デゴザッスッギイ

(山デゴザイマスナラ)

前提法確定

山デカッスッケン

(山デスカラ)

私デゴザッスッケン

(私デゴザイマスカラ)

接續法

山デガッシテ

(山デシテ)

山デゴザッシテ

(山デゴザイマシテ)

疑問法

山デカッスッカン

(山デスカ)

私デゴザッスッカン

(私デゴザイマス)

第十五、シヤッ シヤア

終止法

山シヤア

(山ダ)

前提法假定

山シヤアギイ

(山デアルナラ)

前提法確定

山シヤアケン

(山ダカラ)

第十六、マッスンゴザア マッセンゴザア

終止法

ヨミマッスンゴザア (ヨミマス)

ヨミマッセンゴザア (ヨミマセン)

連体法

ヨミマッスンゴザア時 (ヨミマス)

ヨミマッセンゴザア時 (ヨミマセン)

前提法假定

ヨミマッスンゴザアギイ (ヨミマスナラ)

ヨミマッセンゴザアギイ (ヨミマセンナラ)

前提法確定

ヨミマッスンゴザアケン (ヨミマスカラ)

ヨミマッセンゴザアケン (ヨミマセンカラ)

疑問法

ヨミマッスンゴザアカン (ヨミマスカ)

ヨミマッセンゴザアカン (ヨミマセンカ)

助 辭

法を持ちたるものを助動辭といふに對して、法をもたぬのを單に助辭といふ。一、名詞、代名詞が動詞、形容詞等の主なる時に添ふもの

○ン

ハナン 咲く。 (ハナガ) (花の、が)

カキン 倒れタ。 (カキガ) (垣の、が)

ハルン きタ。 (ハルガ) (春の、が)

アメン 降る。 (アメガ) (雨の、が)

ヒトン 通る。 (ヒトガ) (人の、が)

かく二音以上より成りてゐる主格名詞で、其の末音が子音である場合には必、ンが添る。ンはノの父音である。普通口語にてはガ、文章にては、ノ又はガがる場合である。

○ノ

カノ 食ふ。 (カガ) (蚊の、が)

キノ 倒れタ。 (キガ) (木の、が)

フノ 煮ゑタ。 (フガ) (麩の、が)

ケノ 生ゑタ。 (ケガ) (毛の、が)

コノ 泣く。 (コガ) (子の、が)

一音より成りてゐる、名詞、が主格である時はノを添ふるが、普通である。

タ、アノ 倒れタ。 (タルガ) (樽の、が)

カ、イノ 折れタ。 (カイガ) (權の、が)

チ、イノ か、つタ。 (ツユガ) (露の、が)

ス、ウノ 合はヌ。 (スウガ) (數の、が)

ノ、ウノ 始る。 (ノ、ウガ) (能の、が)
 ウンノ 悪イ (ウンガ) (運の、が)
 引音、撥音、又はイが主格名詞の末音である時にはノが添るのが普通である

○ガ

風より アメガ 多イ。
 ハナガ 美しイ。
 カガ 一番 うるさイ。

なほ比較する場合、又は

タラ、ウガ きタ (太郎が)

サンスケガ 働イテ井ル。 (三介が)

ゴンベ、エガ 行イタ。 (權兵衛が)

がなほ特別名詞にはガを添ふる場合が多いやうである

代名詞が主格である場合には趣が差つてゐる。

ワタクシガ 云ふ。 (私が)

ソイガ 悪イ。 (ソレガ) (其が)

アイガ よイ。 (アレガ) (彼が)

アッチガ 廣イ。 (アナラガ)

ドイガ 善カラ、ウ (ドレガ) (孰が)

ダガ 爲タカ (誰が)

代名詞が主となる場合にはガがそふ場合が多いけれども、對稱にはノを添ふるとが通常である。

ワイノ 云うタ。

オトノ 持つてきたタ。

オマイノ オ云ひナサッタ。

アナタノ オ云ひナサイマシタ。

これも亦子音より受くる時はノがんに變ることが多い。

オトン 云うタ。

アナタン オ云ひナサイマシタ。

二、名詞、代名詞が他の名詞の意味を定むる場合

○ン

サクラン 花

ナシン 花

ツルン 聲

ウメン 花

モモン 花

○ノ

カノ 聲

キノ 葉

スノ 味

(櫻の)

(梨の)

(鶴の)

(梅の)

(桃の)

(蚊の)

(木の)

(醋の)

ケノ 穴

(毛の)

コノ 親

(子の)

タ₁アノ 中

(樽の)

タイノ 魚

(鯛の)

ル₁ウノ 中

(牢の)

ノ₁ウノ 舞

(能の)

モンノ 内

(門の)

引音にはンを添ふることもある。

ル₁ウノ 中

(牢の)

ト₁ウキヤ₁ウン 者

(東京の)

代名詞が他の名詞を定限する場合

〇ン

ワタクシ_ン 本

(私の)

アナタ_ン 處

(アナタノ)

アレ_ン 宿

(アレノ)

(彼の)

ダレ_ン 子

(ダレノ)

(誰の)

〇ガ

オイ_ガ 本

(ワタクシガ)

(己の)

アイ_ガ 宿

(アレガ)

(彼が)

コイ_ガ 根性

(コレガ)

(是が)

ウンガ 頭

(ウマガ)

(奴が)

かく母音のイ又は撥音より續く時にはガが添うけれどもワイの下には特別にノが添ふやうである。

ワイノ 心

(汝が)

「ユ」「ッ」「ア」「ド」などいふ代名詞にノが添うて他の名詞を定限する時には、其のノはンに變り、

コン 人

(ユノ)

(此の)

ソソ 時

(ソノ)

(其の)

アン 時

(アノ)

(彼の)

ドン 人

(ドノ)

(孰の)

といふ。又、オマエなどはエは母音であるけれども、

オマエ 内

(オマヘノ)

(御前の)

どめいふやうである。とかく代名詞は其の語により習慣がまち／＼である。

三、名詞、代名詞が動詞、形容詞の賓として用らるゝ場合

○ ナ

鳥が エ 食ひチル。

(エヲ)

(餌を)

私も メシ 食ふ。

(メシヲ)

(飯を)

かくナを省く場合が多い様である。

○ ナ

鳥が エチバ 食ひチル。

(餌をば)

鳥が エバ 食ひチル。

(餌をば)

酒ば 飲む。

かく佐賀地方にてはナバと正しく云ふともあるがバを添へていふとが多い。

○イ

オ₁ホサカ₁イ 行く。

(オ₁ホサカニ)

(大阪に)

(Osaka va)

ムサシ₁イ 在る。

(ムサシニ)

(武藏に)

オ₁ホツ₁イ 行く。

(オ₁ホツニ)

(大津に)

(Ohi)

カ₁ウベ₁イ 居る

(カウベニ)

(神戸に)

(Kobe)

キヤウト₁イ 行く。

キヤウトニ

(京都に)

(Kyote)

イガ、上のアウエオなどの音と合して、引音に發音さるゝ場合には、音に變化を生ずるとは、度々述べた通りである。即、アイ₁ヤ₁ア、イ₁イ₁イ₁、ウ₁イ₁イ₁イ₁、井₁イ₁、エ₁イ₁エ₁エ₁、オ₁イ₁エ₁エ₁、名詞の末音にイがある時には、其のイはいつもりに變りてそれが引音に發音さるゝ。

シヤンハリ₁イ せく。

(シヤンハイニ)

(上海に)

ヘイタリ₁イ 行く。

(ヘイタイニ)

(兵隊に)

クワリイ 行く。(クワイに)。(會に)

又シ及引音の下には文語と同じくニを添ふる。

トウキウニ 行く。(東京に)

ダイワンニ 行く。(臺灣に)

クワントウニ 行く。(關東に)

ペキンニ 行く。(北京に)

○ サン・サマイ (Sanyā) サニヤ (Sanyā)

ヒカシサン 行いた。(ヒガシへ)。(東へ)

マエサン 向け。(マへへ)。(前へ)

ムカウサマイ 渡れ。(ウカウへ)。(向へ)

(Sanyā)

コッチサニヤ 來い。(コナラへ)。(此方へ)

「サン」「サマイ」「サニヤ」皆同意である。「サン」は「サマ」(方)の訛にして、「サマイ」は「サマニ」の訛であらうか。又、「サニヤ」は「サマイ」の訛であらう。

○ ヨイ

フデヨイ 黒が 高イ。(フデヨリ)。(筆より)

ユキヨイ 氷が 冷イ。(ユキヨリ)。(雪より)

文語にては「東京ヨリ歸ル」など動作の起点を示すにも用ふれども、方言にては、亦普通口語にては、較ぶる場合の外、用ひられない。

○ カーア (ka)

クニカ^一ア 來タ。

(クニカラ)

(國より、から)

ア^ツチカ^一ア 來タ。

(アチカラカラ)

(彼方より、から)

この場合に於て文語にては「ヨリ」「カラ」共に用ひらるゝけれども方言にては「ヨリ」を用ふることはない。

○ デ

カタナ^一デ 殺す。

(刀にて)

フ^一デ^一デ 書く。

(筆にて)

動作をする道具となる賓格は皆、デを用ふる様である。

○ マデ は文語と違ひない。

○ テ

此は ナン^一テ 讀むか。

(ナント)

(何と)

フ^一デ^一テ 讀む。

(フデト)

(筆と)

直^クッ^テ 云^ウタ。

(クルト)

(來^キと)

コドモ^一テ 云^フ 者^ハ。

(コドモト)

(小供と)

四、名詞、代名詞の主格、賓格、又は副詞などに添うて其の意を助くるもの

○ ア
ハナ^一ア 咲かん

(ハナハ)

(花は)

ウシ^一ア 食は^ン

(ウシハ)

(牛は)

(USIYA)

マツ^一ア 生え^ン

(マツハ)

(松は)

(MAYE)

アセーア 出てン (アセハ) (汗は)

(Asya)

ヒトーア 來ン (ヒトハ) (人は)

(Hita)

「ア」は「ハ」の母音である。この「ア」は常に上の音と連合して引音に發音さるゝから、イ列音とか、エ列音に添ふ場合には拗音に發音にさるゝのである。即、ウシアーシャ ソデアーソデアア などの通である。

ジブンア 來ン (ジブンハ) (自分は)

(Jibunna)

「ア」が「ン」に添ふ場合には「ン」が「マ」に引つかゝりて「マ」は「ナ」ア」と發音さるゝ。即、ジブンナーア」と發音さるゝが通常である。クッソオン」(觀音)が クッソオンと發音さるゝと同じ理である。

シャンハリーア 要港である。 (シャンハイハ) (上海は)

(Shanharvā)

トケリーア 持たン。 (トケイハ) (時計は)

(Tokeryā)

「ア」が「イ」添ふ場合には「イ」は常に「リ」と變りて、其の「リ」が「ア」と連合し拗音に「リャア」と發音さるゝ。

引音の下には「ア」は添はないで普通に「ワ」が添ふ。

キーイワ 和歌山縣 (キイハ) (紀伊は)

キイワ

和歌山縣

ダイスーウワ 出來ン。 (ダイスウハ) (代數は)

ダイスーウワ

出來ン。

ゴンベーエワ 種播く。 (ゴンベエハ) (權兵衛は)

ゴンベーエワ

種播く。

キコーウワ 誰か。 (キコウハ) (貴公は)

キコーウワ

誰か。

- モは文章語と同様に用ひらるゝ。
 - ツ、ユソ、ナンなどは方言には殆、用ひられない。
 - バシ
 - ネコバシ 居タカ。 (猫や、居たる)
 - ニクバシ 食ひタカ。 (肉や、食ひたる)
 - クニカ、アバシ 來タカ。 (國よりや、きたる)
 - ユキバシ するか。 (行きや、する)
 - クロ、ウバシ なッタカ。 (黒くや、なりたる)
 - ユカジ、イバシ 居る。 (行かずにや、居る)
- 「バシ」は普通口語にて「デモ、カ」といふ様な場合に用ひらるゝ様である

が文語にては疑辭の「ヤ」といふ場合に當てはまる様である。つまり強辭と見てよからう。

- デャア (dya)
 - ワタシデャア 無イ。 (ワタシデハ) (私にては)
 - コイデャア 役立たヌ。 (コレデハ) (此にては)
 - キデャア 造られン。 (キデハ) (木にては)
- 「デャア」は「ニテハ」の訛であらう。「デャア」と發音するものもある。
- デン
 - ダイデン 來ン。 (タレデモ) (誰も)
 - ナンデン 食ふ。 (ナニデモ) (何も)

イチデン 食はン。(ウチデモ) (魚も)

○ ドン

サケドン 飲まウ。(サケドモ) (酒)

ハナドン 見て來イ。(ハナドモ) (花)

サンポドン 爲ウカ。(サンポドモ) (散歩)

キドン 爲ンナラ。(キドモ)

キウドン 行いタ。(ケーフドモ)

○ ト

牛の アユムトア 遅イ。(アユムノハ) (歩むは)

櫻の サクタア 柳の サクトヨイモ 遅イ。

.....(サクノハ).....(サクノヨリ).....

.....(咲くは).....(咲くより).....

アナタントト ワタシントト 較べて 見ヨウ

.....(アナタント).....(ワタシント).....

「ト」は普通口語にて「ノ」といふものと同じ意である。その語原は「コト」の「ト」に於て、「モノ」「ユト」などの意味であらう。

○ ノミ といふ言葉は方言では用ひない。

○ バカイ

ワタクシバカイ 使ふ (ワタクシバカリ)

ヤサイバカイ 食はスル (ヤサイバカリ)

即「バカイ」は「バカリ」なり

○ バッテン (aten)

今日は ヤスミバッテン 忙しイ。 (休ダケレド)

これは ヨカバッテン 嫌イダ。 (ヨイケレドモ)

あれは ハタラクバッテン 弱イ。 (働クケレドモ)

「バッテン」は「ダケレド」又ハ「ケレドモ」の意にして 名詞にも動詞にも形容詞にも添ふ。

○ グリヤーア (gurya)

十里グリヤーア 來タラウ。 (十里グラ井)

(Jurigurya)

粥グリヤーア 食はルル。 (粥グラ井)

○ シコ

コイシコ 讀んだ。 (コレダケ) (是れほど)

ヨムシコ 讀め。 (ヨムダケ) (讀むほど)

シコ はダケといふ様な意味にて、代名詞、動詞、に割ふ。

○ イツチョウウ (itcho)

メシイッチョウウ 食ウカ。

サケイッチョウウ 持ッて來イ。

コイイッチョウウ 爲ねばなるマイ。

ウタイッチョウウ 歌はぬか。

「イツチョウウ」は「一ッ」或は「一丁」「二度」といふ意に用ひらるゝとも

あれども、右の如きは「一ツ」といふ意もなく、又「二丁」といふ意味でなく單に語の調子に用ひらるゝものなり。「サョイト」といふ様を意なり。

五、話の終につくもの

○カ は文語と同じ様に用ひらるゝ、

○カン

あれも ヒトカン (ヒトカ) (人か)

あすも クツカン (クルカ) (來るか)

これにて ヨカカン ヨツカン (ヨイカ) (善きか)

「カン」は疑問の「カ」に「ナ」を添へたものらしいが、「カ」と同様に用ひらるゝ。併し幾分か調子を柔かにする様にある。疑問を表す助辭「カ」

カン等が形容詞に添ふ場合には其の語尾のカが促音に變りて發音さるゝとが多し。

○カイ

あれも ヒトカイ (ヒトカイ) (人か)

あすも クツカイ (クルカイ) (來るか)

カイは疑問の「カ」に「ヨ」を添へたものらしい。これは普通の口語にも使ふやうである。

○カーウ (ko)

あれも ヒトカーウ

あすも クツカーウ

カーウ は カン の訛らしい。「カン」と同じ意に用ひらるゝが、多くは東部地方に通用するものにて幾分か下品にして荒い様な口氣を含みてゐる

○ ケーエ (Ke)

あれも ヒトケーエ

あすも クッケーエ

「ケーエ」も「カーウ」と同様に使はるゝ。が、これは筑後境方面に重に用ひられてゐる。

○ キャア (Kya)

あすも クッキャア。

「キャア」は一層卑しい語として東部地方に使はれてゐる。

○ ハン

あれは ヤマバン (ヤマヅヨ)

あすも クッバン (クルヅヨ)

それも ヨカバン (ヨイヅヨ)

「バン」は自身が然か思ふとを人に表す時に用ふるものである普通口語にも、文語にも適當な譯が見出さない。

○ バイ

あれは ヤマバイ。(ヤマヅヨ)

あすも クッバイ。(クルヅヨ)

あれも ヨカバイ。(ヨイヅヨ)

「バイ」も「バン」とは同じ、「ゾ」「ゾヨ」などの意に用ひらるゝ。

○ バウ (bo)

あれは ヤマバウ。

あすも クッバウ。

あれも ヨカバウ

「バウ」は「バン」の訛であらうが、「バン」同意にて卑しい語である。これは東部地方に重く用ひられてゐる。

○ タン

あれも ヤマタン (ヤマダヨ)

あすも クッタン (クルダヨ)

あれも ヨカタン (ヨイダヨ)

「タン」は「ダ」「ダヨ」などの意にて「バン」とは同じ意であるけれども、これは自身が然か思ふのにあらずして事物が然る意を人に表はす場合に用ひらるゝ様である。

○ タイ

あれは ヤマタイ

あすも クッタイ

あれも ヨカタイ

「タイ」も「タン」と同様に用ひらるゝ。

「タイ」「タン」は想像の助辭より續く場合には「ダン」「ダイ」と濁る。

私も ヨマーウダン。

おれは カヘラウダイ。

○ タイエーエ (taie) タイヨーウ (taiyo)

あれも ヤマダイエーエ

あすも クッタイヨーウ

「エーエ」「ヨーウ」をどはタイに添うて、其の意を重くするものであるが、西部地方にて用ひらるゝ卑しい語である。

○ クサン

あれも ヤマクサン

あすも クックサン

あれも カヨクサン 或は ヨックサン

「クサン」は固より然るとまたはそれに違ひないといふ意を表すものにて普通口語にも文語にも未適當な譯が見出ない。

○ クサイ

あれも ヤマクサイ。

あすも クックサイ。

あれも ヨカクサイ。 或は ヨックサイ

「クサイ」も「クサン」と同じ意である。

○ クサーウ (Kuso) は「クサン」の訛である。「クサン」よりも下品な語である。この語は東部地方に重に用ひられてゐる。

○ ナーアタ (nāta)

ヤマーア ナーアタ ユキン フットッバンタ。

(山ハ) (チーエ) (ユキガ) (フッテ非マスヨ)

キノフ ナーアタ ダイカ キタバンタ。

..... (チーエ) (タレカ) (キマシタヨ)

ソレモ サウデゴサイマスナーアタ

..... (サウデゴサイマスチーエ)

「ナーアタ」は「ナアアタ」の約りたものにて、「チーエキミ」といふ場合にも使はるゝけれども、右の様に單に「チエ」といふ場合にも用ひらる

ヤマナーアタ (ヤマデスカ)

ヨムナーアタ (ヨムデスカ) (ヨミマスカ)

タツッナーアタ (タツルノデスカ) (タテマスカ)

オキッナーアタ (オキルノデスカ) (オキマスカ)

クンナーアタ (クルノデスカ) (キマスカ)

スンナーアタ (スルノデスカ) (シマスカ)

ヨマスッナーアタ (ヨマスルノデスカ) (ヨマセマスカ)

オキタナーアタ (オキタノデスカ) (オキマシタカ)

ヨマンナーアタ (ヨマンノデスカ) (ヨミマセンカ)

右のごとく「ナーアタ」は名詞とか動詞、形容詞または助辭等の終止法に添

うて敬意を表する所の疑問にも用ひらるゝのである。

「ナアア」は「バン」「カン」「タン」あとの添ふ時には「ナ」が省けて「バンターア」「カンターア」と單に「ターア」となる。

ヨムカンターア

ヨムバンターア

ヨムタンターア

ヨムクサンターア

右の「ターア」は單に敬意を表す爲に用ひらるゝものである。故に方言にて敬語を使ひて話談しようと思はゞ、其の語尾に「カンターア」「バンターア」さへ添ふるなら十分である。

ヨムカンターア (ヨミマスカ)

ヨムバンターア (ヨミマスヨ) (ヨミマス)

ヨカカンターア (ヨウゴザイマスカ)

ヨカバンターア (ヨウゴザイマス)

山カンターア (山デスカ) (山テゴザイマス)

山バンターア (山デス) (山テゴザイマス)

ヨマスッカンターア (ヨマセマスカ)

ヨマスッバンターア (ヨマセマス)

ヨマルッカンターア (ヨマレマスカ)

ヨマルッバンターア (ヨマレマス)

- ヨマンカンターア (ヨミマセヌカ)
- ヨマンバンターア (ヨミマセン)
- ヨマーウカンターア (ヨミマセウカ)
- ヨマーウバンターア (ヨミマセウヨ)
- ヨンダカンターア (ヨミマシタカ)
- ヨンダバンターア (ヨミマシタ)
- ヨミゴサッカントア (ヨミナサイマスカ)
- ヨミゴサッバンターア (ヨミナサイマスヨ)
- ヨミンサッカントア
- ヨミンサッバンターア

かく敬意を表すのに、助動辭を用ひないで、「ナアタ」をそへ、又、バンの下「ナアタ」を添へて、「バンターア」「カンターア」といふのは、現今、東部地方一般に用ひられてゐるが、維新頃までは、町人などが重用ひてゐたものにて、士以上にはあまり用ひられなかつたことである。

「ナアタ」はまた約りて、「ナタ」となり従て「バンタ」「カンタ」といふ。

○ ノーウマイ は「ノーウ オマヘ」の訛にして「ナアタ」と同じ意に用ひらるゝが「ナアタ」よりも下等な語である。

併、これも同等までは否時には同等以上にも用ひらるゝ。「ノーウマイ」はまた約りて「ノマイ」といふ。

敬語

話す時敬意を表すには助動辭を用ふるとが多いが、又特別に敬意を含んだ詞がある。いまその大略を左にあげてみよう

一、クウ (食フ)

自身の動作につきて、

私

- クウ
- ク井マッスンゴザア (西部)
- クウバンターア (東部)
- クダサイマッスンゴザア
- ク井イマセッンゴザア (西部)
- クワンバンターア (東部)
- クダサイマッセンゴザア
- (ダブル)
- (イタタク)
- (タベマス)
- (イタダキマス)
- (ダベマセン)
- (イタダキマセン)

打消

未來

- ク井イマッスンゴザラウ (西部)
- クワウダンタ (東部)
- クダサイマッシュー
- ク井イマッスンゴザッタ (西部)
- クタバンタ (東部)
- クダサイマシタ
- (タベマセウ)
- (イタダキマセウ)
- (タベマシタ)
- (イタダキマシタ)

過去

他人の動作につきて、

君

- クウ
- ク井ンサーア
- ク井イゴザッ (東部)
- ク井イゴサーア (西部)
- オアガンサーア
- (メシアガル)
- (メシアガリマス)

打消

ク井ンサレン
ク井イゴザラン
オアガンサレン

(メシアガリマセン)

未来

ク井ンサリウ
ク井イゴザラウ
オアガンサリウ

(メシアガリマセウ)

過去

ク井ンサッタ
ク井イゴザッタ
オアガンサイタ

(メシアガリマシタ)

命令

ク井ンサイ
ク井イゴザイ
オアガンサイ

(メシアガリマセ)

二、ノム (飲ム)

自身の動作につきて、

私

ノム
ノミマッスンゴザア (西部)
ノムバンターア (東部)
クダサイマッスンゴザア

(イタダク)
(イタダキマス)

打消、未来、過去等のつかひ方、前に同じいから以下畧く。

他人の動作につきて

君

ノム
ノミンサツ、ゴザア
ノミゴサツ、ゴザア
オアガンサツ、サーア

(メシアガル)
(メシアガリマス)

打消、未來、過去、命令のつかひかた前に同じいから省く。

六七一
三、イ、ウ (云フ)

自身の動作につきて、

私

- イウ
- イウバンダ (東部)
- イヒマッスンゴザア (西部)
- マウシマッスンゴザア、ゴサッ

- (マウス)
- (マウシマス)

他人の動作につきて

君

- イウ
- インサッ、サーア
- イイゴザッ、ゴザア
- オインサッ、サーア

- (オッシヤル)
- (オッシヤイマス)

四、シル (知ル)

自身の動作につきて

私

- シル
- シッバンターア (東部)
- シイマッスンゴザッ、ザア

- (ゾンズル)
- (ゾンジマス)

他人の動作につきて

君

- シル
- オシンサッ、サーア

- (ゴゾンジナサイマス)

七七一
五、ミル (見ル)

自身の動作につきて

私

ミル
ミツバタンア (東部)
ミマッスンゴザア、ゴサッ

(ミーマス)

他人の動作につきて

君

ミル
ミンサッ、サーア
ミゴサッ、ザア

(ゴランナサル)
(ゴランアソバス)

六、キク (聞く)

自身の動作につきて

私

キク
キキマッスンゴサア (西部)
キクバンターア (東部)

(キキマス)
(ウケタマハリマス)

他人動作につきて

君

キク
キキンサッ、サーア
キツゴサッ、サーア
オキキンサッ、サーア

(ゴランナサル)
(オキキナサル)
(オキキナサイマス)
(オキキアソバス)

七、キル (着ル)

他人の動作につきて

君

キル
キゴザッ、ザア
オキンザッ、ザア

(メス)
(メシマス)
(オメンアソバス)

八、クル (來ル)

自身の動作につきて